

# マイウェイ

No.77  
2011

●特別記念号

## 原三溪に学ぶ 公共貢献物語

協力 原三溪市民研究会



財団法人はまぎん産業文化振興財団

平成23年1月発行 ● 発行人 小川 晃 ● 編集人 富安良和 ● 発行 財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1 ☎045-252-1171 (直通) ㈱西北社 大日本印刷㈱



●特別記念号

## 原三溪に学ぶ 公共貢献物語

協力 原三溪市民研究会

# 特別記念号「原三溪に学ぶ公共貢献物語」の刊行に当たって

財団法人はまきん産業文化振興財団 理事長 小川 是



平素は、当財団の事業に多大なご支援をいただき誠に有り難うございます。

このたび、季刊誌マイウエイの特別記念号として、「原三溪に学ぶ公共貢献物語」を刊行する運びとなりました。

三溪原富太郎翁は、「三溪園」の創始者として、大変馴染み深い方ですが、明治・大正時代を中心に生糸貿易や製糸業の実業家、横浜財界のリーダーとして活躍し、また、美術

にも造詣が深い文化人としても、横浜の発展に多大な足跡を遺された横浜の偉人であります。

当財団では一昨年、横浜開港百五十周年記念事業の一つとして、稿本こうぼんのまま六十年以上活字化されていなかった故藤本實也かじもとじつや氏の著書『原三溪翁伝』の出版に当たり助成を行いました。この『原三溪翁伝』は、三溪翁の業績や人物像などを通じて、横浜の発展史を著

した大変に貴重な評伝であり、本号では、その

の中から生糸貿易の危機や七十四銀行破綻しちじゅうし はたんに際しての救済、関東大震災後の横浜復興、社会福祉的な支援活動、そして、芸術・文化の振興など、原三溪翁が多方面にわたって遺された公共貢献への功績を要約して、ご紹介をいたしました。

時を経た今日、改めて公共貢献の重要性に思いをいたし、私益より公益を優先した原三溪翁の行動規範は、いつの時代においても普遍的なものであり、その実践された公共貢献に学ぶことは、大変に意義あることと思われ

ば、誠に幸甚でございます。

当財団の設立母体で、原三溪翁が初代頭取を務めた横浜銀行（当時の行名は横浜興信銀行）は、昨年十二月に創立九十周年を迎えましたが、七十四銀行の破綻による横浜興信銀行の設立に至る苦難の道のりのなかにこそ、まさに原三溪翁の公共貢献への思いの深さを感ずることが出来ます。この記念すべき時期に本号を刊行することができましたことは、誠に感慨深いものがございます。

最後になりましたが、本号を発刊するに当たり多大なご協力をいただきました原三溪市民研究会の皆さまをはじめ、関係者の方々に對しまして深く感謝を申し上げます。

## 原三溪に学ぶ公共貢献物語

表紙／三溪園。大池から旧燈明寺三重塔を望む。撮影：松尾順造。  
 原富太郎（三溪）。写真提供：横浜銀行。  
 裏表紙／開園間もないころの三溪園。正面左の門柱には、三溪自筆  
 による看板「三溪園」が掲げられた。三溪園所蔵。

98	96	95	89	82	80	72	70	62	60	52	50	44	42	36	34	24	22	14	8	4											
編集後記	財団事業のご紹介	執筆協力者一覧／原三溪市民研究会のご紹介	「年表」原三溪とその時代	「唯有義耳」の精神／三溪の人間像／三溪園の継承／美術コレクションの継承	エピソード●公人としての三十年	【人物コラム】鈴木達治	古美術の研究／美術資料の集成／新進画家の後援	第7章●日本美術の振興	【人物コラム】朝比奈宗源	自然の地形を生かした庭園造成／不朽の古建築群／三溪園の社会的貢献／三溪園の国際的価値	第6章●三溪園の公開と社会貢献	【人物コラム】和辻哲郎	横浜繁栄の礎を築く／大横浜建設の理想／横浜港築港に当たって／愛市の一念	第5章●横浜の大御所として	【人物コラム】徳宮蘇峰	横浜市復興信用組合／横浜衛生組合連合会／日本輸出絹物同業組合連合会／日本絹業協会	第4章●公共事業の援助と震災復興整理	【人物コラム】岡倉天心	恩賜財団済生会／財団法人協調会／財団法人神奈川県匡済会	財団法人神奈川県乳児保護協会／出獄人保護会／共益不動産株式会社	第3章●関東大震災からの復興	【人物コラム】益田孝	横浜貿易復興会の結成／損失負担問題の解決に向けて／横浜市復興会会長として	第2章●七十四銀行の破綻と横浜興信銀行の誕生	【人物コラム】中島信行	営利を離れて蚕糸業を指導／第二次帝国蚕糸株式会社／第二次帝国蚕糸株式会社	第1章●蚕糸業における功績	はじめに／三溪原富太郎の幼少年時代／立志遊学、そして結婚へ／実業家としての歩み	特別記念号「原三溪に学ぶ公共貢献物語」の刊行に当たって	財団法人はまきん産業文化振興財団 理事長 小川 是	プロフィール●三溪原富太郎の生い立ちと実業家への道

# 三溪原富太郎の 生い立ちと 実業家への道

## はじめに

『原三溪翁伝』（本号巻末95ページ参照）は、横浜生糸検査所の技師であった藤本實也が三溪没後に執筆した評伝で、第一篇「事業と生涯」、第二篇「公共貢献」、第三篇「性格と趣味」からなる九〇〇ページ以上の大著です。

本号は、その第二篇である「公共貢献」の内容を要約したのですが、三溪の人生と人物像を、より詳しく理解していただけるように、プロローグとして「三溪原富太郎の生い立ちと実業家への道」を、エピソードとして「公人としての三十年」を加え、各章のあいだには「人物コラム」

欄を設けました。巻末には年表「原三溪とその時代」を付しています。

一般に雅号としての三溪の名は、今日では三溪園の創始者として知られていますが。しかし、本名の原富太郎としての実像は忘れられがちですが、その活動が横浜や神奈川の歴史だけではなく、日本の近代史にもかわる広がりや深さをもっていたことを知っていただければ幸いです。

なお、執筆につきましたは、原三溪市民研究会および、財団法人三溪園保勝会 参事の川幡留司氏のご協力をいただきました。

## 三溪原富太郎の幼年時代

元号が明治に変わる直前の慶応四年（一八六八）八月二十三日、青木富太郎（のちの原三溪）は美濃国厚見郡佐波村（現岐阜県岐阜市柳津町）で父青木久衛と母ことの長男として生まれました。青木家は古くからの素封家で代々庄屋を務めた家柄で、清和源氏にもつながる土岐家の後裔と伝えられています。

祖父の久八は、農業に加え絹の行商で家業を再興した意志強固な勤勉家として知られ、博徒連に囲まれても平然と追いつ返すほど度胸の据わった人物だったといえます。対して久八の長男久衛は、温厚

篤実な人柄で衆望を集め、自ら養蚕を率先垂範し、養豚の奨励や農事改良の助成に力を尽くしました。

母方の祖父は、高橋杏村（本名友吉）です。南画家で詩書にも才を発揮し、多くの名士と親交がありました。

杏村の長女ことは、青木久衛の妻になり、三男七女をもうけ、先妻の長女を含めた十一人の母親になります。芯の強さをもつ一方、温順な性格の賢夫人でした。文字の読み書きに通じた読書家で、さすが杏村の娘と言われました。

そのような両親のもとで生まれ育った三溪は、幼少より神童とよばれ、周囲の者からは、祖父杏村の生まれ変わりと思



右／岐阜の三溪の生家（青木家。岐阜県歴史資料館所蔵。上ノ若き日の三溪。三溪園100周年 原三溪の描いた風景より転載）



三溪と家族（明治30年ころ）。前列左から4人目が妻屋寿、右へ長女春子、二男良三郎を抱く三溪、長男善一郎。岐阜県歴史資料館所蔵。



跡見花蹊（1840～1926）。明治8年、東京に跡見学校を創立。画家としても知られる。学校法人跡見学園所蔵。

われていました。三、四歳のとき、絵柄で百人一首の人名を覚えたという三溪は、四歳から五歳まで、近所の寺子屋に通います。その後、学制が敷かれ小学校に入ると、杏村の長男で叔父の高橋鎌吉（号杭水）のもとで画を学びました。

少年時代の三溪の気概を示す逸話があります。「祖母の実家に手土産の菓子袋

を持って遊びに行ったところ、実家の主人はその手土産をそのまま庭先の植木職人にあげてしまいました。子供心にも怒りを覚えた三溪は、その実家には二度と行かなかった」というのです。

小学校を終えた三溪は、大垣にある野村藤蔭の鶏鳴塾で漢詩漢文を学びます。門人千人を有す塾の当主である藤蔭は、温厚で寡黙、人をして自然に畏敬の念を抱かせる風格を備え、教え方は叱咤激励するのでなく、自省し改めるよう諄々と説くやり方でした。三溪は二里（約八キロ）の道のりを、十五歳まで徒歩通学しました。

「梅檀は双葉より芳し」といわれますが、

祖父杏村の遺伝的資質と良師藤蔭の感化を受けた三溪が、詩書墨跡に秀拔さを発揮したのは決して偶然のことではありません。

### 立志遊学、そして結婚へ

三溪が青雲の志を抱いて故郷を出たのは、明治十七年（一八八四）、十六歳のときでした。儒学者の草場船山のもとで漢学を修め、詩文を学びますが、京都での学業を不十分と感じた三溪は、天下の大舞台である東京へ遊学する決心を固めます。とはいえ両親の承諾を得ることは難しく、学資の仕送りは期待できず、辛酸困苦を覚悟しての上京でした。

翌年、東京専門学校（のちの早稲田大学）に入り、政治法律を専攻した三溪でしたが、東京での生活は予想をこえた苦しさで、学資不十分のため、思うように学問ができません。三溪は、父久衛に学資の支援を懇願しますが、久衛は一切これを謝絶し、息子に帰郷を促します。しかし、大都会に単身飛び込み勉学を積み、立身出世の道を開こうとする息子の志の高さと決意を前に結局は同意し、三溪は、ようやく勉学に打ち込むことができるようになった。

明治二十四年（一八九一）、三溪は原善三郎の孫娘屋寿と結婚します。三溪は原

二十三歳、屋寿は十七歳でした。

三溪は、その三年前より名門として知られる跡見学校（現跡見学園女子大学）の助教師として漢学と歴史を教えていました。そこへ原家のひと粒種である屋寿が入学し、三溪と出会い、二人はすぐに相思の間柄となります。しかし、三溪同様、屋寿も家の跡取りであったため、縁談は簡単に進みませんでした。二人をよく知る同校教師、中島湘煙（中島信行の妻俊子）と校長の跡見花蹊の仲介があった、ようやく結婚に至り、これを機に三溪は原商店の入り婿になり、横浜の生糸業界に関わることとなりました。

原輸出店とフランスの代理店名の入った英文ポスター（1908年）。日本地図を織りだしている着物姿の美人が描かれ、四製糸場の写真と生糸価格の変動を表すグラフが入っている。Collection Christian Polak



三溪は社員一人一人と誓約書を交わし、方針の徹底と意思の統一を図りました。経営改革には旧習の撤廃という痛みが伴いますが、三溪は長年の功労者に対して、退社後の衣食にも事欠かない優遇策

を取って、円満退社を実現させ、近代的学問を修めた新進有能な人材を招致し、要職に抜擢の上、権限を委譲したのです。「創業は易く、守成は難し」といわれま

生糸業界における必須の選抜肢でもありました。明治三十五年（一九〇二）、三溪は、生糸供給力の安定確保を狙い三井家から富岡・名古屋・大樽の製糸場を譲り受け、渡瀬と併せて近代的四製糸場を確立しました。こうして「製造・技術・販売の一貫体制」を短期間のうちに整備したのです。

そのために地所部や林業部など安定した事業分野にも注力しました。また一時的な目先の利益にとらわれることなく、先代から引き継いだ原合名会社の継続発展のため、一貫して合理的かつ堅実な経営姿勢に徹しました。こうして三溪は蚕糸業界では数少ない成功者として、政界や経済界からも認められる稀有な実業家への道を歩みました。

右／原善三郎（1827～99）。下／亀屋。「横浜は善きも悪しきも亀善のはら（腹＝原）一つにて事決まるなり」と俗諺に謳われるほどの存在だった。ともに三溪園所蔵。



## 実業家としての歩み

原商店（屋号亀屋）は、埼玉県出身の原善三郎が文久二年（一八六二）、弁天通三丁目に開店した生糸売込問屋です。善三郎は海外市場の拡大を背景に事業を拡張し、横浜きっての大商人になりました。明治六年（一八七三）横浜生糸改会社社長となり、その後、第二国立銀行頭取、横浜商法会議所会頭、衆議院議員などを歴任、華々しい経歴を有する政財界の第一人者でした。

そんな善三郎のもとで、三溪は、部屋住まいの店員見習いとして働くことになります。政財界の大物と旧来の大番頭ら

に挟まれ、養子の窮屈さと気苦労は並大抵なことではなかったはずですが、黙してひたすら店員業務に集中、そして明治三十二年（一八九九）、善三郎の死去に伴い家業を継ぐことになりました。その間八年、三溪は、原商店のあるべき姿を胸中思案していたに違いありません。

その証拠に、善三郎を継いだ直後、三溪は大胆な経営改革を断行しました。原商店を原合名会社へ改組し、適材適所の人事刷新を行い、経営の合理化を図ります。さらに生糸売込業のほかに輸出部を設け、生糸の直輸出へ進出します。

居留外国人商人をとおさずに直接海外へ輸出する「自主的貿易事業への脱皮」は、

# 蚕糸業における功績

## 営利を離れて蚕糸業を指導

原三溪は、原商店の初代原善三郎の死去にともない家業を引き継ぐと、組織を原合名会社に刷新して多角的な経営に乗り出しました。富岡、名古屋、大崎、渡瀬の製糸場経営や、輸出部の創設、先代より引き継いだ第二銀行の経営、そして新規の事業にも手を染め実業家として活躍し、その堅実な経営ぶりと事業の成功で彼は横浜で誰もが認める存在となりました。

三溪は初代善三郎ほど公職につきませんでした。蚕糸業の発達を促進するために行った公共的努力は見逃すことが

できません。三溪は目先の儲けにとらわれない、蚕糸業全体の公益となることを積極的に行って業界全体の発展を促し、そのことが最終的には個々の製糸家の利益になるという視点で事業経営に取り組みました。

たとえば、明治二十九年（一八九六）から全国の製糸家及び蚕糸関係者へ寄贈された『生糸貿易概況』（年刊）や、一般にも配布された『生糸日報』（日刊）の発行は三溪のアイデアによるもので、生糸貿易の情勢や日々の生糸相場、市場の取引状況の情報を提供し、全国の蚕糸業者にとつてたいへん有益なものとなりました。また技術員を全国各地に派遣して蚕



富岡製糸場全景。明治時代後期。原時代社宅、第二工場、煙瓦煙突などが完成している。片倉業株式会社が提供。

糸業の発達改良に努力したり、とくに製糸場の経営にあたって原料繭の蚕種改良を積極的に行って広めたことは全国の先駆けとなりました。

このような、常に業界に対して貢献する三溪の精神は、横浜の蚕糸業が未曾有の恐慌を迎えたときに発揮されたのです。

## 第一次帝国蚕糸株式会社

大正三年（一九一四）六月二十八日、オーストリアの皇太子夫妻がボスニアで暗殺されるという事件をきっかけにして、七月二十八日に第一次世界大戦が勃発します。これにともない交戦国の経済界はたちまち動揺を起こし、それは東洋にも

波及しました。わが国産業界では、とくに生糸貿易に影響が大きく及び、市場が混乱状態となりました。

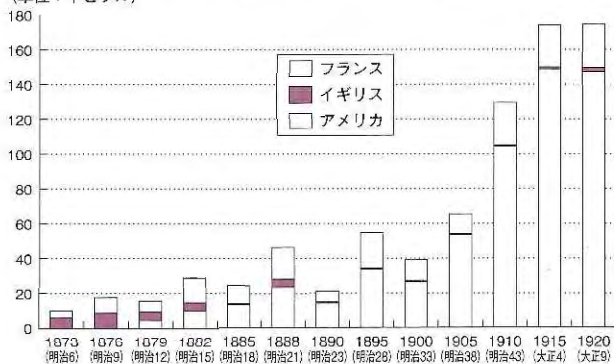
国内の生糸業界はすぐに手を打ちます。横浜蚕糸貿易商同業組合は臨時総会を開いて全国の製糸家へ生産調整の対応を講じ、大日本蚕糸会は渋沢栄一を委員長に据え、三溪、三代茂木惣兵衛をはじめとする実行委員十八名を選び、救済補償案をまとめ政府への交渉を始めました。

このとき三溪は三井物産会社顧問の益田孝に協力をもちかけました。そのときの様子を「中々の難題でやりたいと思うが中途で旨く行かない場合に投げ出されは困る」と語る益田に、三溪は「国家



## 日本生糸の輸出先(1873~1920)

(単位：千ピクル)



\* 石井寛治『日本蚕糸業史分析』41頁より作成。

右/益田孝(1848~1938)。公益財団法人三井文庫所蔵。下/竣工当時の三井物産横浜支店(現三井物産横浜ビル1号ビル)。遠藤家寄贈・横浜都市発展記念館所蔵。



す。次の緊急勅令の諮問でも「蚕糸救済法案」は否決となつてしましますが、三溪ら委員の水面下での働きにより、政府は「当業者に二〇〇万円の出資組合を設立させ、国庫剰余金から五〇〇万円の補助をする」という案を立てて会社設立へ踏み出しました。

これにより大正四年(一九一五)三月二十日、帝国蚕糸株式会社(第一次)が設立され、社長に原三溪を選出しました。恐慌勃発より八カ月後のことでした。

会社は市況下落の時期前後二回にわたり生糸六八万斤余を買収して市場の安定をはかり、その後、市況が回復したところで大正五年(一九一六)三月下旬まで

の一大事であり、われわれの職業としても大切である。横浜としても大いに関係のある問題である。私はどこまでも一身を賭してやるから、決して中途で放り出して貴下にやらせて自分が引つ込むことはない」と決意のほどを語り、益田を救済運動へ引き入れたと、三井物産横浜支店長であった北村七郎が語っています。

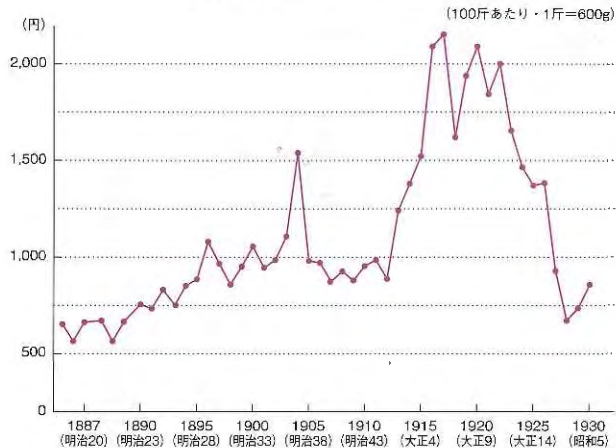
また三溪は若槻礼次郎蔵相の私邸を訪れ、救済組織について、「これは蚕糸業を救済することが目的であり、資本金七〇〇万円のうち政府出資を五〇〇万円とし、この金額をもって業務を営営するものです。欠損の場合はまず政府の出資額をもってこれに充て、利益のたつた場合

に売り抜き、買入価格一〇〇斤につき二八〇円八銭の利益を上げました。これにより助成金五〇〇万円を返納すると同時に利益金一七〇万斤余を政府に納入、株式払込金も配当をつけて払い戻しをしました。そして大正五年六月十五日の株主総会で解散を決議し、会社の使命を完了しました。

この帝蚕株式会社の経営はひとつ間違えば蚕糸業者すべての命運を引き受けるものであり、慎重かつ適切な判断が求められる、たいへん責任の重いものでした。社長就任にあたって三溪は、「自分のところは生糸の製造、売却商、買入商も兼ねており最悪の場合は自らの会社で対応

は出資者に対して配当を行い、それでもなお余剰のあるときは蚕糸業に関する公共的事業に寄付いたします。役員は政府の監督を受け、時局の解決をみれば、これを解散するものです」と説明して理解を求めました。こういった場合、事が成就するか否かは、いかなる人物を動かして成功させるか、いかなる手を打って事運ぶかにかかります。三溪のこのあたりの呼吸と行動力には見事なものがあります。

時々刻々と情勢が悪化していくなか、この救済案は大隈重信総理の内諾も得ることができ、ようやく議会にかけられましたが、議会の解散で流産してしまいました。



右／茂木合名会社・三代茂木惣兵衛（『茂木惣兵衛遺文集』国立国会図書館蔵より）。上／茂木合名会社事務室。明治後期。小野昭子氏寄贈・横浜市史資料室所蔵。

し責任をとる覚悟であった」と、後年手記の「随感録」に明かしています。

三溪の訪問を受けた若槻蔵相は、のちに「その運動中、原と対談し、その説明その抱負を聞かせてもらったとき、彼は慎重でゆつたりとした落ち着いた態度で、しかも誠意をもって熱く、この救済案が決してぬかりのない万全で堅実な内容であることを詳細に説明してくれた。そして決して政府に損失の迷惑はかけないと断言をした。その時私は原の人物を見抜き、これならば間違いあるまいと強く感じた」と述べています。

このように三溪がその人物をして政府から全幅の信頼を得たことが、この第一

社と一、二を争う生糸商・茂木合名会社が破綻したことは、横浜のみならず全国の蚕糸業者に大きな動揺を起こしました。混乱に対処するため、蚕糸業同業組合中央会と大日本蚕糸会は全国の蚕糸業者へ製糸場の操業短縮と生産調節を呼びかけました。同年九月、組合は糸価調査委員会を開き、当業者がシンジケート（共同組織）を一〇〇〇万円で組織して、政府から五〇〇〇万円の融資を受ける案を決議します。関係機関や各大臣に陳情を行い政府の承諾を得て、大正九年九月二十五日、名称は前例にならった帝国蚕糸株式会社（第二次）が創立されました。今回三溪は、自分は陣頭に立たず他に

次帝国蚕糸株式会社の成立のカギとなり、そのあとの成功につながったといえます。

## 第二次帝国蚕糸株式会社

第一次世界大戦による恐慌をくぐり抜けた日本の生糸業界では、戦後の好景気とともに糸価も上昇します。大正九年（一九二〇）三月には糸価の暴騰は最高となりますが、その直後、反動で株式市場は大暴落、糸価も大下落をきたし一気に恐慌が勃発し、回避することができませんでした。五月に入ると各地の製糸家が工場閉鎖、倒産に追い込まれ、さらに横浜の七十四銀行の休業と連動して茂木合名会社が破綻します。横浜で原合名会

譲りたいと考えていたので、県知事経験のある実業家浅田徳則が社長に就任しました。しかし設立後、会社の成果が上がらず政府より重役交代の案が出される事態となります。前回の手腕と政府筋からの信任で三溪が筆頭専務に推され、再び全力を尽くすことになりました。

一次、二次と生産調整を行っても生糸市場の滞貨は七万梱あり、十一月になって資金も尽きはじめ社内に閉塞感が漂うなか、三溪はひとり山本農相と相談を重ね、毎日関係各所、各議員を訪問する日が続きます。そして日夜ほとんど寝食を忘れて準備を整え、買入れを行い、二カ月が過ぎたころ、ようやく打開の兆しが

見えてきました。翌大正十年（一九二一）三月二十五日、政府からの三〇〇〇万円の補償案が決まります。ここからは生糸の買入れも順調にすすみ、その年の五月末には打ち切りとしました。

保管については、第一次帝國蚕糸株式会社のときに、生糸が固着したり虫害にあつたりしたという失敗があり、その反省から今回は生糸を乾燥させて缶詰にす

るといふ提案がなされます。しかし糸価暴落のうえ、乾燥させるのは経費がかかりすぎて二重の損失になるといふ理由で、どの業者も挙手するものはなく、結局三溪が自分の系列の工場を使って損を承知で乾燥を引き受け、六万梱を缶詰にして保管しました。

しかし、これは結果として長期保管でさることを市場に知らせることになり、

糸価の下落を招くことはありませんでした。そればかりか、日本は生糸の長期保管を意図していると考えた米国が、日本から生糸を出荷してもらえないと恐れられたため、かえって糸価は値上がりを始めました。そのため保管していた生糸は高値で売りさばくことができ、大正十一年（一九二二）九月二十六日には全部売り終わったのです。

生糸の買収にあたっては、帝蚕会社で買入れた生糸を売りさばく先が原輸出部では批判されるだろうと考えた三溪は、帝蚕の荷物を買収しないことを決め、店員にこの荷を買収しなくても差し支えないよう万全の準備をさせたといいいます。

後に自らの会社は結局損失を被ったことを告白していますが、三溪はそこまで徹底して公と私をわけ帝國蚕糸株式会社に心血をそそぎ、公益を優先して責務を全うしました。

明けて大正十二年三月二十一日、第二次帝國蚕糸株式会社は株主総会を開きます。純益八七三万円余の決算報告を行い、わが国の蚕糸業の危機救済の目的を達成したうえに、多額の利益を獲得する好結果で終わりを迎えました。そして余祿から横浜市に生糸検査所拡張費として三〇〇万円、生糸絹物専用倉庫建築資金として一八〇万円の寄付がなされ、その役目を終えました。



竣工当時の横浜生糸検査所（設計：遠藤於菟、竣工1926年）。上は、横浜生糸検査所での検査風景。ともに横浜都市発展記念館所蔵。

## 中島信行 〔一八四六—一八九九〕

つい最近、三溪園内鶴翔閣の案内をしている時に、三溪在世中、三溪園には多くの有名な人が訪れましたと申しましたところ、高知県から来たという青年に、「坂本龍馬は来ましたか」と言われたのは少なからず驚きました。「この庭園を作りました三溪翁が生まれた前年に龍馬は亡くなっていますので」と申しましたら、「それは無理でしたな」と即納得してくれました。「ところが、全く無関係ではないのですよ」と間髪を入れず、龍馬の大崇拜者である私は、やや得意になって次のような話をしました。

中島信行は土佐藩の出身にて、龍馬率

いる「海援隊」において、後年外務大臣となる陸奥宗光とともに若手三羽鳥の一人として、龍馬に重く用いられた活躍をしています。龍馬の死後、この二人は中央政府に任せ、中島、陸奥ともに神奈川県県令に、さらに中島は県令の前に横浜税関長にも就いています。

この頃、横浜原家の初代善三郎は、東京・横浜間に鉄道が敷かれた時の祝賀式にご臨席の明治天皇の御前にて、横浜の住人を代表して祝辞を述べたほどに横浜を代表する豪商となっていました。したがって、この両者は仕事上接する機会が多く、互によく知り合うことになり

ました。横浜を代表する豪商となりながらも、この原家を継ぐ男性がいなかったため、善三郎は孫娘屋寿に婿を迎えるにあたり、各方面に適任の人の紹介を頼んでおきましたところ、跡見学校創設者の跡見花隠の仲介にて岐阜出身の青木富太郎（のちの三溪）が婿入りをする事となりました。この時に仲人役を務めたのが中島信行と俊子夫妻でした。

以上のことを伝えると、そこに居合わせた十数名の人が皆驚くほどの大声を上げました。

さて、青木富太郎にしても、岐阜柳津の旧家の長男にて既に跡継ぎと決められていたもので、すんなりとは行きませんでした。そこで原と青木両家の間を取り持ったのが跡見花隠と、花隠とは旧知

の間柄であった中島俊子でした。

ところが、熱烈な愛情で、また陸奥の強いすすめにて結ばれた中島夫妻は、三溪園が開園される数年前、中島が五十三歳、夫人は三十八歳の若さで相次いで亡くなり当時数多くの人びとの涙を誘い、今尚その純愛は語り伝えられています。

中島とともに坂本龍馬が大いに頼りにした陸奥は、伊藤博文のすすめで欧米に游学、十分成果を取めながらも明治十九年密かに帰国し半年余り表に出ませんでした。この時か、それとも後年体調を崩し外務大臣を辞任した後にか、かつて伊藤博文が遊び松風閣と命名しました眺望絶佳の原家の本牧別荘を訪れ、数カ月逗留されたとのことでした。

——川崎留司／三溪園保勝会参事



写真提供／国立国会図書館

中島信行（なかじま・のぶゆき） ●高知県出身。板垣退助の自由党結成に参加、副総理となり板垣総理を支えた。明治二十三年（一八九〇）帝國議會開催時、初代衆議院議長になるなど中央政府で活躍。また、女性解放運動の先駆者として知られた岸田俊子と結婚したことで有名。



松風閣。原家の本牧別荘として、重要な客人が招かれたが、関東大震災で倒壊。三溪園所蔵。

# 七十四銀行の破綻と 横浜興信銀行の誕生



第二銀行本店。明治二年（1869）開業の横浜為替会社の建物で、焼失により明治4年に再築されたもの。「横浜銀行六十年史」より転載。横浜商工会議所所蔵。

## 横浜における銀行の開業と発展

横浜における銀行業は、開港後間もない、文久三年（一八六三）に、英国のウエスタン・インディアン中央銀行が横浜に支店を開設したことに始まります。その後、東洋銀行などの外国銀行の支店ができましたが、明治になるまで日本の銀行はありませんでした。

明治二年（一八六九）、原善三郎を中心とした横浜の豪商たちにより、横浜為替会社が設立されます。「為替会社」は、「BANK（銀行）」の訳語であり、わが国最初の会社組織の金融機関として、全国に八社設立されました。明治五年（一八

七二）の国立銀行条例公布に対応して、横浜商人からの請願により、明治七年、横浜為替会社は第二国立銀行に組織変更します。

続いて明治十一年（一八七八）、横浜では、茂木惣兵衛、大谷嘉兵衛などの発起により第七十四国立銀行が、同十三年には貿易金融を行う特殊銀行として、中村道太らにより横浜正金銀行が設立されました。その後も次々と市内に銀行が設立されました。

国立銀行は、明治二十九年（一八九六）公布の営業満期国立銀行処分法に基づき私立銀行に転換して、国立の名が取られ、第二国立銀行・第七十四国立銀行は、

した。

## 七十四銀行の破綻

第一次世界大戦中、日本は空前の好景気に沸きましたが、大戦終了後の大正九年（一九二〇）三月十五日、突如として東京株式市場が暴落し、戦後恐慌が始まりました。

それぞれ第二銀行・横浜七十四銀行に名称変更をしました。第二銀行は原善三郎次いで原三溪が頭取となり、横浜七十四銀行は代々の茂木惣兵衛が頭取となつて経営にあたり、業績を伸ばします。出資の關係から前者が原家、後者が茂木家の勢力範囲に置かれ、両家の事業に必要な資金を預金として集める、いわゆる「機関銀行」となっていました。

横浜七十四銀行は、大正七年（一九一八）六月に七十四銀行と改称し、さらに同年八月、親会社の茂木合名会社の飛躍的な事業拡大にともない規模を拡大した茂木銀行と合併して、横浜最大の普通銀行、全国的にも有数の銀行へと発展しま

七十四銀行は、關係が深い茂木合名会社の経営悪化の影響を受けて経営が行きづまり、四月いっぱいまで休業しなければならぬ状況に追い込まれます。日本銀行はほかの銀行にも取付が起る可能性があるかと憂慮し、その危険な状況を回避するためには七十四銀行が休業しないほ



井坂孝。横浜興信銀行設立時の副頭取、後に第2代頭取に。横浜商工会議所会頭、横浜火災保険社長等要職を歴任した。横浜銀行所蔵。

右、明治11年（1878）に設立された第七十四国立銀行本店（横浜諸会社諸商店之図）。『横浜銀行六十年史』より転載。神奈川県立博物館所蔵。下、第七十四国立銀行発行の五円札。横浜銀行所蔵。



整理案作成を一任された井坂孝は、まず両行の内容を詳細に調査し、このまま破産した場合には債権者への支払は元金一〇〇円に対し三五円程度が限度で、しかもその支払に六〇七年はかかると試算しました。預金者への影響、ほかの銀行での取付発生・破綻などの地域経済への

ときなり、たとえ如何なる犠牲を払うとも五万人の零細なる預金者の為にその混乱を救済するの要を認め、これより同志を集め東奔西走その善後の処置を講じ結局政府に向て財界安定の為に若干の援助を得んことを決議し」と後日自ら書き記しているように、預金者救済に当たる決意を固めました。

影響は、計り知れないものでした。そこで、横浜の有力者の手によって新銀行を設立して、預金払戻しに必要な資金は政府からの特別融資で賄うとする案をつくりました。

三溪、井坂孝らは十数回にわたって政府に特別融資を要請しましたが、高橋たかはし清大蔵大臣が「七十四銀行が破綻しても、それは、一私企業の破産問題に過ぎない。それに対して政府が租税によって集めた資金を支出することは将来に悪例をのこす」と強く反対しました。このため、原敬首相に、破綻した銀行の救済ではなく、預金者と地域経済の救済策であることを説明し、ようやく七月下旬に了承を得る

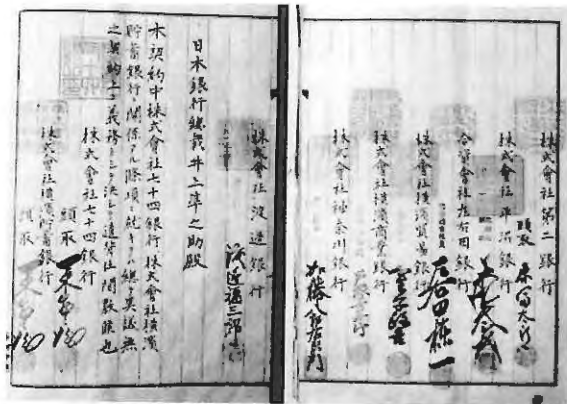
うが経済安定のためになると判断して融資を行いました。しかし、茂木合名会社の業況があまりいと噂が立ち、取引先から茂木あてに貿易代金や貸金が立て続けに請求されました。その支払資金は七十四銀行でなんとか賄っていましたが、それも不可能になりました。そして、五月二十四日、系列の横浜貯蓄銀行とともに、突如三週間の休業を公表しました。その後も再開のめどが立たず、休業の延長が繰り返されます。

両行を合わせ、預金残高は約五〇〇万円、預金口座五万五〇〇〇口座、このうち一口二五〇〇円以下の小口預金者が四万人以上を占めていました。当時の横

浜市の総戸数は七万五〇〇〇戸でした。  
**預金者と横浜経済の救済**

時の神奈川県知事井上孝哉も事態を憂慮し、横浜きつての実業家原三溪（第二銀行頭取）と日銀総裁井上準之助の友人で横浜火災保険株式会社常務取締役の井坂孝に救済への助力を懇請しました。井上知事は、五月二十七日県庁内に市内の有力な銀行家や実業家を招いて七十四銀行の休業問題について協議しました。その結果、原三溪・井坂孝ら四名が七十四・横浜貯蓄両銀行の整理相談役に推挙されます。

三溪はこのとき「これ余が力を効する



日本銀行からの1600万円の借入契約書。横浜に本店を置く7行の連帯保証を受けた。横浜銀行所蔵。

に至りました。

## 整理案の内容と承諾書の徴収

政府からの資金援助のめどはつきましたが、それには、横浜に本店を有する普通銀行九行の連帯保証が条件とされた（特殊銀行、貯蓄銀行は対象外）。これらの銀行にとっては容易に応じられない重大な問題でした。しかしながら七十四・横浜貯蓄両銀行に残っていた約三〇〇〇万円の財産を、他の債権者に優先して政府の融資一六〇〇万円の弁済に充てることにするという三溪の英断により、銀行の連帯保証は安全なものになって、九行の同意を得ることができ、整理案の

形体が整いました。なお、東京所在の銀行と合併・移転した銀行などがあり、最終的には七行の連帯保証を受けました。

これを受けて、大正九年八月二十四日に整理案を発表しました。

### 〔整理案概要〕

- ①整理銀行として新銀行を設立する。新銀行の株主への配当金は、無配当とし、その利益を留保する。
- ②政府より十カ年据置で一六〇〇万円借入れる。
- ③一口二五〇〇円以下の預金者へは全額支払い、二五〇〇円を超える預金者へは二五〇〇円まで支払う。ただし利息はつけない。

④二五〇〇円を超える預金は、無利息据置で十年後に元金を支払う。

⑤政府に対する債務については、横浜に本店を有する銀行が連帯保証をする。

この整理案を成立させるためには、債権者全員の承諾を得ることが必要でした。当時の法律では、一人でも反対した場合、この整理案はまともらず法律上の破産になり、元金一〇〇円に対し三五円程度しか支払われないことになるため、何としても全員の承諾書を集めなければなりませんでした。

このような状況下で、整理案に基づいて、数十名の預金者の総代および七十四銀行行員は、八月二十四日より承諾書を

集め始めました。しかしながら預金者は約五万人おり、その所在地は、遠くは七十四銀行の支店があった京阪地方をはじめ各地に及んでいました。

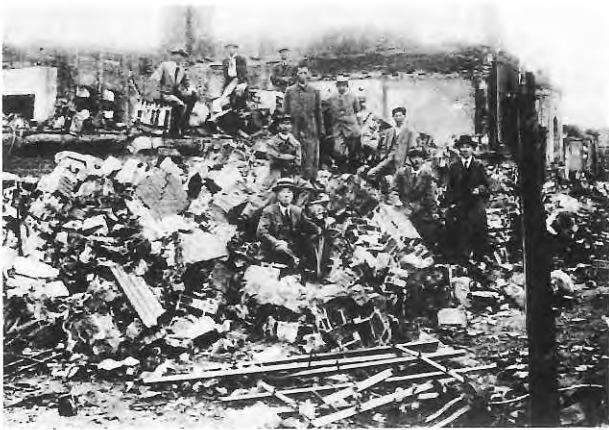
その承諾書の内容は、預金者が心血を注いで得た財産である預金の支払を延期するもので、十年間無利息据置の承諾書の判をもらうことの困難さは容易に想像できます。二五〇〇円までであっても利息は支払われません。預金者が会社の場合、もし承諾の判を押しして資金が十年間固定化すれば明日にも会社が倒産してしまふと恐れて承諾できない、そのような事例がたくさんありました。また中には、最後まで承諾しなければ、特別有利な条

件にしてもらえらるだろうと考える人たもいました。さらにこの整理案に対して反感を持った大口預金者の中には、「十年間無利息で据置を承諾させようとするのは結局ただにされたと同じことだ。そうして、われわれが承知しなければ多数の預金者が支払いを受けられないと言ってくる。多数の預金者を救済するために、脅迫をしているようなものだ。このような案を持つてくるとはけしからん」と言ってきた人もいました。

最後まで頑張れば有利な条件でという者に対しては、井坂孝が毅然と対応し、ごね得を許しませんでした。また、相談なしに無理押しするのはけしからんと反



大正9年（1920）開業当時の横浜興信銀行本店。明治38年横浜七十四銀行本店として建築され、大正7年に七十四銀行本店となる。横浜銀行所蔵。



関東大震災により焼失した横浜興信銀行本店。  
横浜銀行所蔵。

感を持った人に対しては三溪が対応し、人格と徳望によりとりまとめました。

承諾書の徴収作業は混乱をきわめましたが、担当者の不眠不休の努力により十一月末までには大部分の承諾書を集めて困難な一〇〇口ばかりが未承諾として残りました。これらは、事情を聞いてみれば、判を押せという方が無理というものばかりでした。それまで個別訪問によって了解を求めてきましたが、方針を変えて、この人々に集まってもらい、整理相談役は、「承諾してくれという我々の方が無理を言っているわけであるが、承諾を受けられるならば、年内に一六〇〇万円の現金が預金者全体の手に入るが、

承諾を受けられないならば一銭も年内に入らない。少し大局から考えて何とか承諾をいただきたい」と挨拶しました。このような方法により承諾書集めに尽力しました。そして十二月二十五日午前二時ごろ、最後の承諾書が集まりました。

### 横浜興信銀行設立と大震災

承諾書の徴収のめどがたった大正九年十二月十日に神奈川県内において、新銀行設立の発起人総会が、また、十六日には設立総会が開かれました。ここに七十四銀行・横浜貯蓄銀行の整理というきわめて公共性の高い使命を負った新銀行、すなわち横浜興信銀行の誕生を見るに至

りました。新銀行の頭取に原三溪、副頭取には井坂孝が就任しました。株主・役員には整理相談役四名をはじめとして、連帯保証に応じた横浜市内本店銀行の各頭取も名を連ねました。このようにして、三溪、井坂孝をはじめとした地元財界人が、無報酬・無配当で経営に参画し、出資することによって、横浜興信銀行は産声を上げることができたのです。

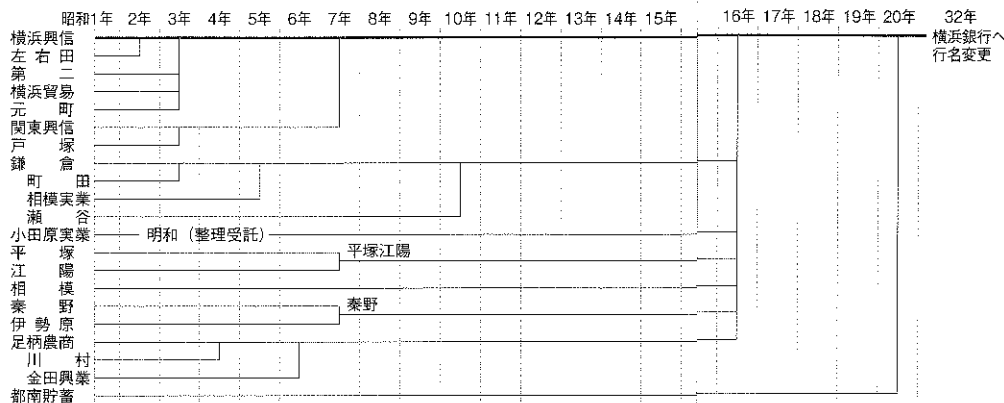
横浜興信銀行は、十二月二十五日に政府からの借入金一六〇〇万円を受けて開業、翌二十六日から整理案に従って小口預金者への支払いを開始し、翌年六月までに完了しました。

ところが、営業開始から三年後の大正

十二年（一九二三）、関東大震災が起り横浜は大打撃を受けました。横浜興信銀行も本店をはじめ、横浜市内全店を焼失するなど大きな被害を受けました。銀行の帳簿も預金者の通帳も大部分焼失してしまい、預金者からの支払請求に見当がつかない状況となりました。そのようななか、三溪の指示を受けて、横浜興信銀行では、預金者の窮状を救うため一日も早い支払いに應じるべく、預金者の記憶による申し出にはその半分をすぐ支払い、残額は早急に調査する対応をとりました。他行が預金者の申し出全部に押し問答をして、決定するまで全額支払いをしなかったなか、横浜興信銀行の誠意あ



横浜興信銀行が受け継いだ銀行(昭和以降)



る対応に預金者は非常に感謝しました。大震災の影響に加え、昭和初期の恐慌が重なった厳しい経営環境の中、無利息で十年据置いた大口預金者への元金支払期限の昭和五年(一九三〇)を迎えましたが、この環境では、すべての債務を返済することは不可能でした。三溪、井坂副頭取ら首脳陣は、預金の支払いに重点

を置くことを決断し、政府と日本銀行に返済猶予を請願し、承諾を得ました。この結果、預金者には、据置預金一五四七万円のうち一〇〇〇万円を限度として支払い、残額については、再び無利息で十年据置くことになりました。

大震災と恐慌という二つの大きな出来事が発生したとはいえ、さらに十年間支払いを猶予せざるをえなかったことについて、三溪ら首脳陣の苦悩は非常に深いものでした。特に三溪は、預金者に対して面目上言い難い責任を痛感しました。「原頭取は、八十歳以上も生さられる人でしたが、七十四銀行のために確かに寿命が縮みました」と三溪没後、主な行員

が語っています。病を得た三溪は、昭和十年(一九三五)七月に、任期満了に伴い退任し、後任には井坂副頭取が就きました。そして、昭和十四年(一九三九)、満七十歳で不帰の客となりました。

昭和十五年十二月は、七十四銀行(正式には七十四商事。七十四銀行は、昭和十二年に銀行業務を廃止し商号を変更)の整理に最終的な解決をはかる年でした。井坂頭取以下首脳陣は、預金者への債務返済を完結することを最優先し、個人預金者に対しては全額を支払い、法人及び公金預金については、個々の預金者との話し合いにより一定率の支払いを行い、残額について債権放棄を懇請し承諾を得

ました。こうして、開業から二十年かけて、一般債権者への債務返済は完了しました。七十四銀行の整理にかかわる横浜興信銀行の負債としては、日本銀行からの借入金が残りましたが、昭和二十五年(一九五〇)五月をもって完済しました。

柄農商銀行と合同しました。

このようにして、横浜興信銀行は、二十年の苦境に耐え、困難を切り抜け神奈川県内の銀行を受け継いで、神奈川県唯一の普通銀行となりました。

原三溪は、井坂孝とともに横浜興信銀行の生みの親、育ての親でした。もしも、七十四銀行破綻の際に、その整理案が成立しなかったならば、どうなっただでしょうか。三溪の苦心は、じつに横浜の救済

横浜興信銀行は、昭和二年(一九二七)の左右田銀行、同三年の第二銀行との合同を皮切りに、昭和七年(一九三二)関東興信銀行と合併、そして昭和十六年(一九四一)に一県一行主義の政策に従い、神奈川県内に本店を有する普通銀行の全部、すなわち、鎌倉銀行、明和銀行、平塚江陽銀行、相模銀行、秦野銀行及び足

でもありません。横浜興信銀行は、昭和三十二年(一九五七)に横浜銀行と改称し、今日地方銀行第一位の預金量をもつ銀行となっています。

## 益田孝

〔一八四八—一九三八〕

わが国財界、美術・茶道界における大人鈍翁益田孝は、二十歳も年下の三溪を、「原は美術について中々偉い、だが事業ではさらに偉い」と絶賛、三溪は終生異例の厚遇を受けることとなります。

明治二十二年、横浜における原家初代の善三郎が亡くなり、跡を継いだ三溪は、従来からの外国商館への生糸売込業を継ぐとともに、さらに事業の拡大を図り、直接外国へ生糸を売込む貿易業と、製糸業にも着手することになります。

その時に三溪は、益田の信頼度高く三井家から有名な富岡製糸場をはじめ名古屋、大崎（栃木）製糸場などを譲り受け、

一大製糸家ともなりました。

この後、三溪はわが国蚕糸業の発展に尽力し、生糸は、横浜港からの年間全輸出量の最高位を、開港から昭和十六年、アジア・太平洋戦争が始まるまでの八十二年間保ち続けます。その間、常に安泰とはいかず、世界大戦、大恐慌などにて蚕糸業界でも何度か危機を迎えます。その時に三溪は、蚕糸業救済のため特設された帝国蚕糸株式会社社長となるなどし、蚕糸業の救済に尽力し、見事成功します。

益田は、三溪の数々の業績を称え、また積年の苦勞をねぎらい箱根強羅の自ら

の別荘という桁外れの贈物をします。三溪は此処を好み、折々に利用しました。

益田は、美術と茶道にも通じこの世界では鈍翁の名で指導的な立場にあり、狩野探幽秘蔵の《弘法大師座右銘一巻》を入手したことで、わが国の主要政財界人に声をかけ「大師会」を興し、明治十年頃から東京品川御殿山の広い自邸（碧雲台）にて、明治の末からは小田原の（掃雲台）に居を移し、そこに建てられた幾つもの茶室において大小様々の茶会を頻繁に催しました。三溪もその会員となり、大正十二年四月二十一、二十二の両日、三溪園全園の完成を祝し三溪園を会場に「大師会茶会」を開催した際、当時

豊臣秀吉が千利休に設計を依頼し京都聚楽第の中に建てたと伝えられていた園内

で最も有名な建造物臨春閣の席主は鈍翁が務めました。ちなみに、この臨春閣に對し、徳川家光が京都一条城内に建て、後年春日局に賜ったという伝えの聴秋閣の席主には、同じく茶友として知られた青山根津嘉一郎が当たりました。

また、内苑の奥深くに、三溪が千利休の遺構として著名な、京都山崎の待庵を意識して造られたと思われる一畳目目の茶室があります。この茶室の床柱には、千利休によって完成された京都大徳寺の山門金毛閣二階の高欄の廢材を使っていることから金毛窟と名付けられています。よって、この茶室の扁額も、今利休と称された鈍翁が最適人というところで鈍翁に揮毫を依頼しました。

——川幡留司／三溪園保勝会参事



大正7年（1918）、三溪の好みによって新築された茶室金毛窟。三溪園所蔵。



写真提供／国立国会図書館

益田孝（ますだ・たかし）●新潟県出身、アメリカ公使館、大蔵省、横浜の貿易商館などに勤めた後、明治七年（一八七四）、井上馨と三井物産の元となる先収会社設立。二年後に三井物産とし、初代社長に就任。やがてわが国財界の重鎮となる一方、美術に通じた茶人鈍翁としても名を成した。

## 関東大震災からの復興



震災復興を喜ぶ市内有力者。昭和4年（1929）4月24日、昭和天皇の行幸の際に記念式典が催された。前列左より2人目が原三溪。『昭和4年 天皇行幸 写真帖』所収。横浜市史資料室所蔵。

## 横浜貿易復興会の結成

大正十二年（一九二二）年九月一日に起こった関東大震災は、東京、横浜に大被害を与えました。横浜では被災家屋が九割に及ぶ惨憺たる状況となりました。焼け野原に市民は茫然自失、疲労と不安のなかで肉親の安否を探り、衣食住を求めて右往左往するばかりでした。四日には戒厳令が敷かれ軍隊が出動します。

大震災の当日、原三溪は休暇を利用して、野村洋三を伴い箱根芦の湯の去来山房に避暑にきていました。その日は強羅別荘白雲洞にいましたが、縁側から突然庭先に放り出されたのです。事の重大さ

に、三溪は急遽下山し横浜に帰ることに

しました。小涌谷、湯元、小田原、平塚、藤沢……、東海道を連日歩き通し、疲れ切った足を引きずってようやく横浜にたどり着きます。三溪は足の痛みで歩くのも困難な様子、小舟で三溪園の海岸に漕ぎ着け、やっとわが家に到着したのは九月四日午後でした。

そのころ生糸貿易業者の人びとは三溪の帰浜を待ちわびていました。九月七日、横浜公園に結集して「蚕糸貿易を一日も早く復活することに決死の努力を期す」と決議すると、直ちに三溪園に赴き横浜貿易復興会の結成と会長就任を三溪に懇請しました。しかし三溪はすぐには承諾

しませんでした。

三溪の手記「随感録」には、当時、すでに神戸では横浜港に代わって生糸貿易再開が議論されており、輸出商も横浜の急速な復興はないと考えて神戸で買付けの準備をする動きがあったこと、そのため横浜は危機一髪の間があったこと、また復興会会長就任の要請があったが、諾否を一両日延期してもらったのも、第一は金融の援助の見通し、第二は浮き足立つ輸出商の横浜引き留め策を探り、会の組織活動方針を考えるためだったことなどが記されています。

しかし、最も信頼する多年の知己、井坂孝（横浜商業会議所会頭）からも強く

要請を受け、会長となる決意を固めます。

六十余年の積み重ねが一瞬にして崩れ去った横浜の生糸貿易の復興という難事業が、三溪の肩に重くのしかかってきました。井坂は政府援助の意向打診のため、帝大同窓生の井上準之助蔵相を訪ねます。井上蔵相からは横浜復興支援、日本銀行と正金銀行の金融支援の明言を受けるとともに、三溪・井坂両名への心強い激励も受けました。二人は早速、横浜貿易復興の具体案を練り、夜を徹して組織作りに取り組んだのです。

生糸の主な輸出商には三井合名会社を主力に、日本棉花会社、江商会社など神戸と密接な関係をもつ会社も多く、営業



震災で焼け残った車両を使用した屋根なしの路面電車。「ブラック電車」と呼ばれ、震災被害者の足となった。横浜開港資料館所蔵。

- ① 横濱生糸取引には政府が破格の援助を与えること
- ② 正金銀行は、内外為替を無限に引き受けること
- ③ 生糸用電信は応急回復すること
- ④ 税関保税倉庫を全部借り受け、生糸六万梱を収容し軍隊が保護すること
- ⑤ その他手配が整い、四、五日中に生糸

取引を開始すること  
さらに復興会は全国に宣伝隊を派遣しました。そして昼夜兼行でバラックを建設し、横浜貿易復興会事務所と共同市場が竣工します。声明通り九月十七日午後、生糸の取り引きが再開されました。

市場再開問題とともに早急に解決すべき問題は、震災による焼失生糸の損害をどのように負担するのかわかることです。焼失生糸五万六〇〇〇梱、損失額約六〇〇〇万円。製糸家、問屋、銀行、輸出商それぞれの利害と主張がありました。三溪の奔走、斡旋は尋常一様なものではありませんでした。翌大正十三年（一九二四）五月、やっと裁定書発表にこぎ着

の必要上、神戸に市場を開くことに賛同しているとの情報もありました。そこで、主力の三井物産を横浜に引き留めることができれば大勢が横浜に残ると考えた三溪は、三井物産の井上治兵衛支店長に熱意を込めて懇請しました。

「一週間以内に横浜生糸市場を再開するというが、そんなに早くは運ばないだろう」と井上がいう。「いや、必ず十七日には市場開始を誓う」と三溪が毅然として声を張り上げる。「万一成功しなかったときには、君はどうするのだ」「私は直ちに割腹して罪を謝すつもりだ」「その決意があるなら、今から共に全幅の努力を惜しまない」

井上は直ちに東京本社に赴き、神戸の開店を見合わせる承認を得ると同時に、行政当局から援助の確約を得ました。そして翌朝、三井の汽船に三溪、井坂らも同乗して、三井物産東京本社、さらに大蔵大臣、通信大臣、正金銀行頭取を訪問したのでした。

### 損失負担問題の解決に向けて

九月十日、日本大通りの三井物産支店内で横浜貿易復興会が開催され、三溪を会長とする復興会の体制と事業がスタートしました。

三溪は挨拶のなかで、「わが横浜は生糸によって生まれ興隆発展してきた。横

濱はわれわれの生命であるとともに、生糸はわが横浜の生命である」と述べています。さらに「その生糸貿易が、このたびの震災で他都市に追従するようなことがあったら、横浜存亡の重大問題だ。横浜港が六十有余年蓄積してきた経験知識をもって共同一致して、横浜蚕糸貿易の復興を天下に声明できるように奮闘努力することが最大急務だ」として、一週間後に生糸市場を再開することを声明しました。こうして、わずか一週間後（九月十七日）の生糸市場再開を目指して、復興会は一刻の猶予もなく、即刻実行、大活動を開始します。

神戸市側の急速な動きも懸念されまし



大正12年（1923）9月11日、市役所仮庁舎に当てられていた市立中央職業紹介所屋上で震災復興の協議を行う市会。横浜開港資料館所蔵。

けたのです。

① 間屋が保管中の焼失生糸の損害（間屋

二割、製糸家八割負担）

② 看貫（検査）済みの焼失生糸の損害（輸

出商が全部負担）

③ 引き込み中の焼失生糸の損害（輸出商

二割、間屋二割、製糸家六割負担）

こうして、横浜貿易復興会は生糸貿易の復興に成功し、九月、横浜貿易復興会創立一周年記念会が挙行されました。後年この会は、「横浜復興倶楽部」となりました。

### 横浜市復興会会長として

横浜貿易復興会の創立によって再建事

業は着々と進められたのですが、それは主に蚕糸貿易に関わることであつて、震災直後は横浜市全体の復興事業に関しても五里霧中の状態でした。

渡辺勝三郎市長は、広く市民からの意見を総合して復興対策を急がねばならないと、大正十二年（一九二三）九月十九日、桜木町駅前建造されたバラックの市役所仮庁舎で市復興に関する協議会を開きます。各方面から二〇〇名を超える人びとが駆けつけました。渡辺市長の切々たる呼びかけに応えて「横浜市復興会」が組織され、満場の賛意を得て三溪が会長に指名されました。そしてようやく九月三十日、横浜市復興会の創立総会が開催

されたのです。

挨拶に立った三溪は、「今回の事変は横浜開港以来の未曾有の災害だが、反面、幾多の光明も見出すことができる。横浜の外形は焼き尽くされても、横浜市の本体は、厳然として存在している。それは、市民の精神、市民の元氣である」として、三つの「光明」を挙げて、自らの決意を示し、復興に立ち上がった市民を勇気づけたのです。

暗闇のなかに見出した第一の光明は、こうして集まった熱き市民の健在であり、第二の光明は、破壊でまったく白紙になつた横浜には最新の文化を利用して街づくりを行う千載一遇の機会がもたらされ

たこと、さらに、第三の光明として、復興を可能にする四十万市民の勤勉、節約の伝統を挙げ、これらに光明を見出し、援助にのみ頼るのではなく、市民自らの奮起と自力復興の覚悟が必要であると呼びかけました。同日、決議された復興会規定中の庶務規定により総務部（部長原三溪）、計画部（部長井坂孝）を柱とした体制が整備されました。こうして、全員が焼け野原の中を駆け巡り、横浜復興に奔走したのでした。

翌大正十三年（一九二四）九月十九日創立一周年記念総会が開かれました。会長である原三溪は、具体的数字をあけて、震災以来一年間の横浜市民の奮闘努力を

ねぎらいました。渡辺市長は挨拶のなかで、一年前を思い起こし、誰もが横浜の再起に疑問を持っていたとき、横浜市民の本領精神は健在だから、復興完成まで協力一致して進もう、決心と実行さえあれば横浜の復興も決して危ぶむ必要はないと力説した三溪の決意を称え、それに共鳴して懸命に努力を続けた市民、井上蔵相はじめ政府関係の支援について、心から感謝の意を表明しました。

横浜市復興会は満三年間、復興事業に邁進し、遺憾なく事業をやり遂げて、大正十五年（一九二六）九月三十日をもって解散を告げました。

## 岡倉天心

「一八六二—一九二三」

明治三十二年、原家の初代善三郎が亡くなると、跡を継いだ三溪はその胸像の制作を岡倉天心に依頼しています。天心は彫刻家の石川浩洋と協力して制作にあたり、翌三十三年に完成し、原家野毛山別荘内天授院に納めました。天心は、翌日行われた除幕式に参列し、記念講演を行っています。

天心率いる日本美術院の若き画家への三溪の支援は有名な事ですが、これは明治四十四年以降のことにて、それ以前から、三溪は同じ日本美術院の下村観山の画に強く惹かれ、《大原御幸》を購入しています。さらに三溪園内松風閣の主室

の障壁に四季草花の画を観山に描いても良かったと天心に依頼します。

この頃、観山は天心の指導のもと茨城の五浦にあつて、横山大観、菱田春草などと洋風文化の入つて来た新しい時代に相応しい画を描くため苦闘中にて、容易に動けず、間に入った天心は大いに気を揉みますが、結局は引き受けることとなりました。この完成時、天心は観山とともに松風閣を訪れ、主人の三溪などに見事に描かれた四季草花の障壁画を皆満足の笑顔にて眺めながら、思い思いの感想を述べ合ったとのことでした。

これらのことにて三溪をよく知つた天

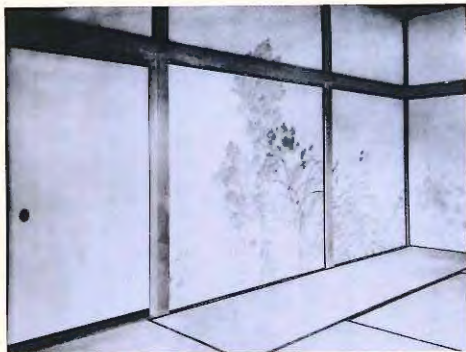
心は、優れた才能を持ちながらまだ世間に知られぬ若手画家の支援を三溪に頼み了解を得ると、まず今村紫紅と安田靉彦が、次いで小林古径、前田青邨がやつて来ます。間もなく次の世代の牛田雞村、速水御舟、小茂田青樹らも三溪園グループの一員になります。画家だけでなく彫刻家の平櫛田中、佐藤朝山なども再々訪れました。

実は、天心は、三溪に支援を依頼して一年半余りして亡くなります。天心は、持病糖尿病の悪化にて自らの命の先長くないことを悟っていたようです。

支援可能の実業家は数多くいましたが、とりわけ三溪に頼つたわけは、三溪園が芸術家が集い、美術を語るにこの上ない環境であり、広大な原邸の奥深くに

は画家専用の部屋まで用意されていたこととです。また、画家達に良い刺激を与える美術品を沢山所蔵していましたので、毎月それらを鑑賞し互いに意見を述べ合う会合を開けたからでもあります。自ら画を描き、美術に通じた三溪と古美術に精通した田中親美が毎回参加しましたので、内容が充実して参加者一同熱が入り、激論夜を徹することしばしばであったとのこととです。安田靉彦は、この会合は極楽のようだったと諸書に記しています。青年時の跡見学校における教職の経験をも活かした三溪の支援は、見事に功を奏し、皆時待たずしてわが国を代表する画家に成長していきました。

——川幡留司／三溪園保勝会参事



三溪園 松風閣・観山の間 大正時代。三溪園所蔵。



写真提供／茨城県天心記念五浦美術館。

岡倉天心（おかくら・てんしん）●神奈川県出身。東京大学に学び、日本の伝統美術の優れた価値を認めた東大教授フエノ口ササと知り合い、共に日本美術の発掘・維持・保存・活用・発展に努める。若くして東京美術学校校長を務めた後、日本美術院を創設。数多くの優れた青年画家を育成。近代美術の発展に尽力した。

## 公共事業の援助と 震災復興整理

### 恩賜財団済生会

恩賜財団済生会おんしきだんさいせいけいは明治四十四年（一九一〇）、明治天皇めいじてんかうの下賜により、窮民きゆうたみんの医療保護事業をはじめ、社会救済を目的に公益法人として発足し、官民が協力した大運動となりました。

原三溪は大いに感激して、進んで寄付を行い、自ら理事に就任して救済事業に努力しました。各方面からの義援金や天皇、皇后両陛下の下賜もしばしばあつて、昭和十六年（一九四一）までに事業費支出はじつに五五〇〇万円、救療患者延べ二億一〇〇万人にも上りました。神奈川県済生会病院を横浜市内岡

野町に、診療所を南太田と根岸に設けるなど、全国に病院や診療所など二二三の医療機関設置のほか、巡回看護班の制度もあり、救済事業が進められました。

### 財団法人協調会

資本主義が浸透した明治末から大正時代になると、事業主と労働者の関係は次第に悪化しました。紛糾は日増しに激しくなり、放置できない事態となりました。そこで政財界有志が立ち上がり、労資間の協調を図ろうと、広く基金を募つて、財団法人協調会を創設することになりました。大正八年（一九一九）のことです。社会政策や労働問題に関する研究調査と



神奈川県済生会の室内。奥の壁に三溪の書「唯有益耳」の扁額が掛けられている。三溪は、昭和4年から会長を務めた。三溪園所属。

公表、政府等への提言、事業主や労働者の研修、職業紹介や労働争議の仲裁和解など、幅広い活動に取り組むものでした。この趣旨に賛同し評議員を務めた三溪は、労資協調に重大な関心をもつて、協会の発展に大きく寄与しました。

### 財団法人神奈川県済生会

大正七年（一九一八）八月、米価暴騰で起こった米騒動は、たちまち全国各地に広がり、寺内内閣も総辞職を余儀なくされました。事態を憂慮した当時の有吉忠一神奈川県知事は、市内の食糧不安を取り除き、騒動を未然に防ぐ応急策として、安い外米を買い付けて、市内で米の

安売りをすることを決めました。農商務省に外米配給を要請し、市内の富豪有力者等に協力を求めたところ、寄付者が続出しました。

八月十四日から、市内各所に米廉売所れんばいじょを設け、各地の巡回廉売も実施されました。県当局の敏速な対応と県下有志の寄付や協力で、神奈川県下は全国でも最も騒動が少なく平穏が守られたのです。

有吉知事は、さらに、応急策ではなく永続的な社会救済事業に関する団体の新設を、久保田横浜市長、大谷横浜商業会議所会頭をはじめ市内の有志と協議し、多数の共鳴と賛同を得ました。大正八年、社団法人神奈川県救済協会が認可

設立(同年十二月神奈川県匡済会と改称)されたのです。有吉知事は会長に、三溪は協会の牽引役として理事に就任しました。さらに、「社会救済の新事業のためには資金が必須、会員の寄付を募るべき」との三溪からの提案があり、協会は一〇〇万円を超える資金を充当し、着々と新事業を進めます。準備米の買い付け、米価の調整、住宅対策、横浜匡済館(のちの横浜社会館)の建設、公設市場の設置など、社会救済事業の実績をあげていきました。昭和四年(一九二九)、三溪は神奈川県匡済会長に就任しましたが、三溪がこの会に寄せた熱意と努力、物心両面の貢献は誰しもが認めるところです。

契機にもなったのです。

## 出獄人保護会

社会事業のなかでも、あまり目立たない取り組みに出獄人保護があります。刑務所を出所しても世間から冷たい目で見られ、職なく住むにも困る出所人に対する保護事業が全国で最初に創設されたのは明治十五年(一八八二)静岡県でした。横浜では、明治三十七年(一九〇四)、出獄人保護会が組織されましたが、金品給与、職業紹介、一時宿泊等、小規模なものでした。やがて明治四十年(一九〇七)には直接収容保護が始まり、修道園と改称。その後も司法省、県市からの助

晩年三溪が財界や各種関係団体事業の第一線を引退するとき、匡済会については会長に踏みとどまり、最期の日まで、会のために尽力したのでした。第一次帝蚕会社の解散時も、三溪が受けた慰労金全額を同会の事業である社会館に寄付しています。

## 財団法人神奈川県乳児保護協会

財団法人神奈川県乳児保護協会は、大正十三年(一九二四)、黒川直胤によって創立されました。第一次世界大戦後、労働・失業問題や生活疲弊が広がって、人口抑制と産児制限の議論が高まるなかで、これに憤慨した黒川は母子保護の重

要性を唱導しました。関東大震災の翌年、被災した乳幼児救済のために本会を起し、乳児院を設立し、虚弱乳幼児のための母子保護施設の経営に当たりました。

黒川から懇請された三溪は、協会の取り組みに賛同し会長を受諾しました。規模の大小よりも取り組み内容が社会救済に大いに役立つこと、人びとがあまり気づかない慈善事業であることなどから、大いに助力しようとして引き受けたのでした。昭和二年(一九二七)のこと、新築なった横浜生糸検査所の一室を借り受け、三溪所蔵の絵画が公開され、その入場料は乳児保護事業の経費に充てられました。保護事業が大いに世の注目を引く

成金を得て事業が拡張され、会名は修道保護会、次いで財団法人修道会となり、釈放者の直接保護や一時的保護、釈放者保護思想の普及、受刑者家族の救護と助力などに取り組みました。

三溪はこれに賛同し、理事就任を引き受けたのです。援助を与えつつ、しばしば三溪園に招待し慰安会や運動会等を開いたりもしました。慈善事業であっても多くの人が顧みないなか、三溪はここにも深い慈愛の手を差し延べたのです。

## 共益不動産株式会社

七十四銀行、茂木合名会社の破綻に伴ない、第三代茂木惣兵衛は総債権者に対

して、自己所有の不動産と不動産全部を提供しましたが、ただちに換金は不可能なので、大口債権者である横浜正金銀行、朝鮮銀行、日本銀行など五銀行は、不動産を五五〇万円で買い取りました。資本金五五〇万円の株式会社とし、株式を早く売却して、損失の穴埋めにしようとなりました。そのためにできたのが共益不動産株式会社です。三溪は、七十四銀行整理の関係で最初から介入して、大変尽力しました。

## 横浜市復興信用組合

関東大震災の打撃によって、横浜市民は極度の金融難に陥りました。ことに中



小商工業者の窮状は大変なもので、いろいろな機関を通じて資金を供給することが必要でした。大正十四年（一九二五）、大蔵省から市に対して融資の通達があり、横浜市復興信用組合が設立され、同年五月、三溪を組合長として、保証責任横浜市復興信用組合の名称で活動を開始しました。組合員に産業・経済に必要な資金の貸し付けと貯金の便宜を講ずる目的で、存立期間は三十年間とされ、商工業者の復興に多大な貢献をしました。

### 横浜衛生組合連合会

大正十年（一九二一）の創立時から三溪が会長を務めている横浜衛生組合連合

会は、市民の衛生思想を進め、健康増進を図るためのさまざまな事業に取り組んでいました。その連合会が開港七十年にあたる昭和三年（一九二八）御大典記念として「保健衛生新横浜之建設」という記録冊子を発行し、会長の三溪が次のような序文を寄せています。

「開港七十年、わが横浜は一大国港として発展し、世界の文物は最初に横浜を通り、日本国内に広められる。ところが新文化と共に市民の日常生活を脅かす流行病、病原菌もまた、真つ先に横浜に上陸する。横浜市民の日常が国全体に影響を及ぼすのであるから、われわれ横浜市民こそ、各自の日常生活を改めて研究し他

都市の模範となるような衛生保健に適した日常を送っているのか、よくよく考えなければならぬ」。市民衛生思想の向上に対する三溪の思いと、横浜を愛する真情の一端がうかがわれます。

### 日本輸出絹物同業組合連合会・日本絹業協会

生糸は横浜開港と同時に輸出されましたが、その後、絹物として加工輸出もされるようになり、明治三十三年（一九〇〇）横浜輸出絹物同業組合がつくられ、さらに三年後の明治三十六年には、各地につくられた同業組合を統合すべく日本輸出絹物同業組合連合会が創立され、横



山下公園の一角に建つ「インド水舎」（昭和14年完成。大震災で被災した居留インド人が横浜市民から受けた援助に感謝して寄贈したインド式水飲み場。

浜に事務所が置かれました。連合会長には長らく茂木家の当主が当たっていました。震災後、三溪が推されて会長になりました。

震災後、神戸に移ろうとしていた絹物貿易を横浜に復興させることを願って、日本絹業協会が創立され、三溪は当業者から推されて協会長に就任しました。

三溪は「随感録」のなかで、絹物貿易商として重きをなしていたインド商人が神戸に移ったため、横浜に戻ってきてもらおうと、協会で店舗を新築し安く貸与したこと、協会幹部の個人保証で金融の便を図ったこと、ようやくインド商人二十余店が神戸から戻ったこと、横浜か

ら輸出する絹物一匹につき一円の補助を協会が出すという苦肉の策も、神戸の反感を刺激し、結局補助が中止となったことなど、当時の様子を語っています。

さらに、神戸から横浜に店舗を移す決意をした店主夫妻が、準備のため横浜のバンドホテルに泊まった夜半火事になったことや終始献身的に難局に当たった協会幹部の存在がなかったら、絹物貿易は横浜から去ったであろうとも記しています。

三溪は、輸出絹物同業組合連合会の大会や絹業協会の会合などの折には、よく関係者を三溪園に招待して慰労の宴を開いたといえます。

# 徳富蘇峰

〔一八六三—一九五七〕

余暇あれば読書か画を描いていたという三溪は、とくに史書を好み、徳富蘇峰の史書は何度も読み返していたということです。原家執事の村田徳治がある時、「大旦那様は、時に蘇峰先生と適量の酒を酌み交わしながら歴史を語り合おうのを楽しみにしていましたよ」と申ししたことがありました。

天候穏やかなある日、蘇峰は三溪園の案内がてら、三溪との会話をさらに内容豊かにして楽しみたいとの意向もあつてか、書画、詩文等に通じ、いずれも商工、通信、文部などの大臣歴のある野田卯太郎、箕浦勝人、大岡育造を伴つて来られ

ました。話題豊かにて和やかな語らいが果てしなく続くほどであつたようにて、後年蘇峰はその時のことを懐かしそうに振り返り語られました。

三溪は、園内の数々の建造物中最も重要かつ有名な臨春閣玄関に掲げる扁額の揮毫を蘇峰に頼み、やがて出来上がつてきますと、三溪はこの扁額執筆の札に自ら描いた《徳川家康産湯の図》を贈つています。蘇峰はこのことについて、「……出緒ある建物の玄関にこれから永久に掲げられることはまことに光榮な事です……」と語っておられます。

ところが、第二次大戦中、横浜大空襲

では全く被害はなかつたのですが、終戦間近に、現在旧矢筈原家住宅と旧燈明寺本堂のある裏山の隣接地に設けられた高射砲陣地を狙い損ねた爆弾が何発か園内に落下し、臨春閣の玄関も爆風で吹き飛んでしまいました。

蘇峰が永久にという思いで書かれた扁額もその時に失われましたことは、まことに残念でなりません。

三溪がこの臨春閣を求めた頃は、豊臣秀吉が千利休に命じて京都聚楽第内に建てたとの伝えにて、その周囲には、秀吉が母大政所のために京都大徳寺内に建てた建物、利休に係わる灯籠、藤堂高虎が秀吉から賜つた手水鉢など秀吉関係の物が多く集められ、配置されています。このことから、「三溪さんは、秀吉がよほ

ど好きだつたんですね」とよく言われます。もちろん大いに敬愛していました。村田執事は何かの折に「大旦那様は、武将では徳川家康を一番尊敬しておられたようでした」と申しておりました。

昭和十四年の夏、三溪はあと一週間で七十一歳という時に生涯を閉じられました。その時、蘇峰は東京日日新聞（現在の毎日新聞）に「原三溪は、横浜における財界人といはんよりは、全般的の長老であつた。思慮もあり、学識もあり、教養もあり世間の実業家と称せらるる仲間では、実に群鶏の一鶴、……」と例の名文にて三溪の死を悼み、その人となり、業績を紹介しています。

——川幡留司／三溪園保勝会参事

徳富蘇峰（しくとみ・そほう） ● 熊本県出身  
同志社英学校（現同志社大学）中退後、自由民権運動に参画。郷里に大江義塾を設立し、青年教育に当たつた。やがて、出世作『将来の日本』を出し上京。「国民の友」、「国民新聞」を創刊。わが国の言論界に不動の地位を築いた。著書に『近世日本国民史』『国民小訓』など多数。文化勲章受章。



写真提供／国立国会図書館。



三溪にあてた蘇峰の書状。三溪より贈られた《徳川家康産湯の図》の礼が述べられている。三溪園所蔵。

## 横浜の大御所として



「嘉永4年の横浜図」1851年 開港前の横浜村の様子（復元図）。  
横浜開港資料館所蔵。

## 横浜繁栄の礎を築く

今日横浜と並んで六大都市といわれる東京、大阪、京都、名古屋、神戸にはそれぞれ由緒ある歴史がありますが、それに比べると開港前の横浜は戸数一〇〇にもみたくない小さな漁村に過ぎませんでした。別表（54ページ）で人口増加の趨勢を示しましたが、横浜が開港によってこれほど急激に発展するとは誰も予想できなかったことです。生糸を中心に海外貿易の輸出港として多額の外貨が入り、外国人の居留地として短期日に繁栄を極めた新開地でした。したがって横浜に集まってくるのは裸一貫で一攫千金をねらう

者が多く、また外国人も横浜を出稼ぎの街として一儲けをすれば国へ帰るものがほとんどといった状態でした。

開国時に結んだいわゆる「不平等条約」が明治三十二年（一八九九）に改正され、これにより治外法権は撤廃されましたが、いまだ多くの土地が永代借地権によって外国人に占められ、まるで植民地の様相を呈していました。それでもこの人種の坩堝ともいえる新天地に飛び込んで成功を取めた人物も少なくはなく、そのような人たちによって今日の繁栄の礎が築き上げられたといってもいいでしょう。

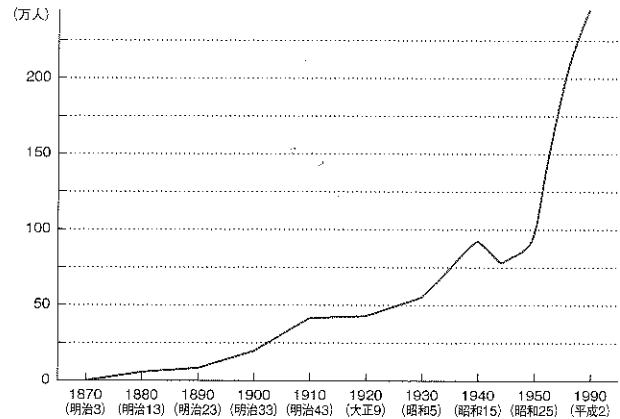
\*

横浜で市制が施行されたのは開港から

三十年を経た明治二十二年（一八九九）四月一日でした。翌五月、市会議員三十五名が選出され、議長に原善三郎、市長に増田知が任命され、市参事会員には朝田又七、大谷嘉兵衛ら六名が挙げられ、七月に市役所を本町一丁目に定めて業務が開始されました。ところが開会早々、市会における対立派の反目により市会は解散、市長以下総辞職となりました。翌年二月の選挙で大谷嘉兵衛を議長に再出発を図りますが、その後も対立は収まりません。

もともと根強い対立は、地主派と商人派の対立でした。瓦斯局事件は、瓦斯局を公売してその

代金を基本財産にして市に引き渡し、この利子で街頭瓦斯の経費に充てる決議を市会に提出しようとする商人派とそれに反対する地主派の対立です。さらに本町町会所敷地建物など、横浜貿易商人が所有する共有物件に対する訴訟事件も起きました。ついに仲裁が入り、商人派の小野光景と地主派の木村利右衛門の斡旋で一応の和解を見ましたが、感情的な反目が収まりません。このままでは横浜の発展を阻害するということになり、明治二十六年（一八九三）、当時の日本銀行総裁川田小一郎に仲裁を頼み、横浜貿易商組合の財産は横浜市に寄贈することに決まりました。



\*「横浜市人口のあゆみ」を参考に作成。

地主派と商人派の争いは、市政や国政にも及び、やがて政友派と民政派の政治的対立へとつながってゆき、三溪をたびたび悩ませました。しかし、明治三十年代半ばになると、両派合同論が巻き起ります。

明治三十五年（一九〇二）三月の衆議院総選挙には横浜市から二名の候補者を立てることになり、商人派から島田三郎地主派から平沼専蔵を挙げて同士討ちを避けようとしたのです。ところが両派の争いは解消せず、翌三十六年の総選挙では中央政界の政友会伊藤博文と憲政本党大隈重信の両領袖に候補者推薦を託すと、平沼を辞退させて前外相の加藤高明と前

文部次官の奥田義人を候補として挙げてきました。これに対して商人派の一部有志は猛反発をし、島田三郎を担いで激戦となり、選挙は島田の圧倒的な勝利となりました。三溪はこのとき加藤、奥田の応援にまわりましたが、この惨敗について「対立を解消するつもりで運動したにもかかわらず、反感を招いてしまったことは、自らの未熟さゆえ。周到な準備を欠き、各方面との疎通が不十分だった」と反省しています。

### 大横浜建設の理想

開港当時の横浜を繁栄に導いた先駆者としては高島嘉右衛門、原善三郎、小野

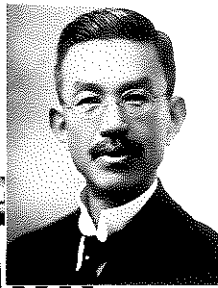
を払いました。

光景、木村利右衛門の四傑をあげることができですが、三溪が原商店を継ぐころは小野光景、次いで最長老格として大谷嘉兵衛が横浜を代表していました。つねに敬虔で控えめな態度でこれら長老たちに接していた三溪でしたが、こと横浜に對する思いの深さは尋常なものではありませんでした。

三溪の目指す理想とは、たんに市区地域の拡大や経済的發展にとどまらず、一刻も早く植民地的な状態から脱して、子孫が代々住みたくなる文化的環境を整えた横浜の建設でした。また、そうした目的を達成するために、市政に関わる人材とくに市長の任に就く人物に非常な関心

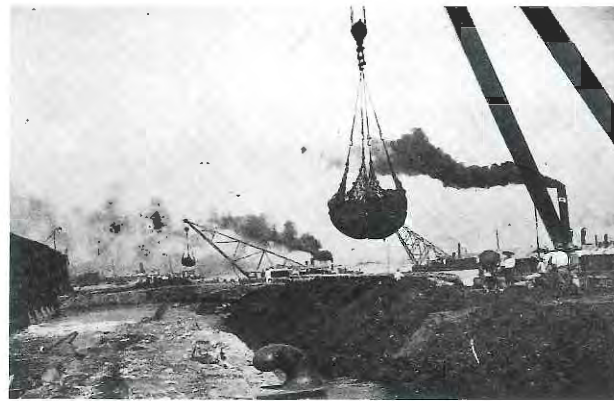
震災復興に当たった名市長有吉忠一の話では、三溪からの市長就任の要請に対して、「政友会と民政会の政治的争いは市政運営上たいへんに困るので、この政争を止めさせることを条件に出したところ、三溪は言下に必ず誓って止めさせる、改めて両派の領袖から正式にお願ひさせる」と答えたといひます。その後、三溪の言葉どおり、政民両派の領袖がやってきて懇望されたので市長を引き受けることになったとのこと。有吉は、神奈川県知事時代に三溪の知遇を得て、市長を二期務めた後は、横浜商工会議所会頭として横浜の発展に貢献しました。

右／有吉忠一（1893～1947）。大正14年5月、横浜の第10代市長に就任し、震災復興に手腕を発揮した。下／横浜市発展について語る有吉市長の講演の様子。ともに横浜開港資料館保管「有吉忠一関係文書」。





横浜市が埋め立てた「臨港工場地帯・絵葉書」。  
横浜みなと博物館所蔵。



新港埠頭の震災復旧工事。  
横浜みなと博物館所蔵。

五十日目に復旧工事に着手し、二年後に完了させました。また、同じ年一時中止していた第三期築港工事を再開しましたが、ただちに第四期築港工事を計画する必要がありました。主要な工事は、鶴見川河口を埋め立て一大工業地帯をつくることで、これは横浜市が行い、さらに政府事業として鶴見川河口と本牧十二天の鼻を結ぶ大防波堤を築くことでした。

この間の事情について、当時の市長有吉忠一は、原三溪、中村房次郎、井坂孝の三人と何度も会合を開いて、鶴見埋立地の大防波堤築造に、どうすれば国庫の支出を仰ぐことができるかを相談しました。そのとき三溪自らが嘆願書と設計見

なお、遡って明治三十六年（一九〇三）の横浜市長選のときも地主派と商人派の対立抗争が激しく、助役を昇格させようとする地主派に対して、三溪は、新しい識見を豊富に持つ第一銀行横浜支店長市原盛宏を推薦しました。市長になった市原は、横浜築港、交通機関の完成、公園整備、図書館、商工業学校、美術館の建設など、諸々の抱負を語り、これらの目的達成のためには「市民相互の融和が大切で、全市を挙げて取り組む必要がある」と訴えています。

### 横浜港築港に当たって

関東大震災の復興に当たっては横浜港

の港湾施設の復旧が急務でしたが、国庫の大部分を東京の復興に費やしたため政府の財政は厳しく、とても横浜に回す余裕がない状態でした。三溪はこうした問題を政治的に解決することに非常な注意を払いました。

明治二十二年（一八八九）に開始された横浜港築港は、明治三十二年（一八九九）に始まった第二期の築港工を経て、大正十年（一九二一）には第三期築港工事が続けて行われましたが、この工事期間中に大震災に見舞われ、港内の諸施設は壊滅的な状態に陥りました。このとき政府は、横浜港の興復は国運の消長に大きな影響を与えると判断して、震災後

積もりを政府に出願したところ、その年の国会で予算が計上されたといえます。

そこで三溪は、鶴見区生麦の埋立を横浜市と協力して浅野総一郎と競争する形で出願しましたが、起債の予算化は難しく、なかなか許可が下りません。ところが、大震災が起り、横浜市再生の道は埋立と工業誘致のほかにないことが清野長太郎県知事にも了解され、起債が認可され、さらに埋立工事の技術も進歩したので計画を拡張して着手することができました。

手記「随感録」の中で三溪は、鶴見埋立と工業誘致の案は、ドイツ・ライン川の事例に関する本を読んでヒントを得た

と述懐しています。

## 愛市の一念

震災後の横浜市財政を悩ませた問題に米貨公債の利子補給があります。これは震災復旧事業充当資金として政府が補給金を出すというのでニューヨークで公債を募集したのですが、昭和四年（一九二九）ごろから対米為替相場が悪化して為替差額の損失が増加し、この元利支払額が市財政を圧迫するようになりました。この問題に対する三溪の働きも一通り



復興なった大栈橋『第20回関東東北医師大会記念写真帳』（1930年）より。  
横浜市発展記念館所蔵。

でなく、多年市会議員として尽力した赤尾彦作は談話の中で、「横浜から大勢で政府官邸に陳情に上がりましたが、なかなか会ってくれないところを三溪の名刺一枚で会うことができ、そのおかげで大蔵次官より、いづれ国から利子補給の措置をするのでそれまで待つようにという一札をもらうことができた」と回想しています。

また、明治十年代以来たびたび計画に上がっていた東京港の築港問題が昭和七年（一九三二）に起こり、この問題についても赤尾は、三溪と一緒に山本達雄内務大臣に会って東京港の拡張計画を打ち切りにさせま

が何か事をする、金を拵（たづ）えるという時には、横浜の実業家の同意を得なければ話がまとまらなかった」といいます。しかし、こうした状況のなかでも三溪は、自らの分をわきまえ、常に天下国家を問題にするにしても、横浜以外に事業を拡張することなく、横浜のためにのみ生涯をさげた人でした。

原家の嗣子（次男）良三郎も「父を語る」と題した談話のなかで語っています。

「父が常に私共に言い聞かせておりましたことは、原家はどこ

した。ところが、三溪没後の昭和十四年（一九三九）秋、東京市は東京港築港の要望を政府に陳情して積極攻勢に出たので、横浜側では市や県だけでなく、隣の川崎、横須賀をも巻き込んで市民同盟会を作り、猛烈な反対運動を展開しました。その結果として、政府は既述の米貨利子補給に対して向う十年間横浜市に元利の大部分を補給すること、東京港は満州（現在の中国東北部）、朝鮮、中国からの日本船に限って入港させ、外国船は横浜港であることなどの協定に同意し、長年の対立は解消されることになりました。

\*

横浜の古老によると、「震災前は政府

までも横浜と生死を共にしなければならぬのである。横浜があつての原家であり、同時に原家があつての横浜であるという気概をもつて子々孫々に至るまで努力しなければならぬ。横浜市に対して父が為しておりましたことを考えてみますと、全く私共に申しておりました事を実行していたものと私は信じております」

三溪が横浜の大御所として横浜市政に関わった功績について赤尾彦作は、盟友中村房次郎との名コンビにより有吉忠一を市長に迎え、東京より遅れていた震災復興を進捗させ、鶴見埋立を実現させたことを挙げています。

# 和辻哲郎

〔一八八九—一九六〇〕

和辻哲郎の夫人照が三溪の長女西郷春子と親友であったことで頻りに三溪園に通うことになり、和辻は数多くの知人友人を連れて来られました。

結婚三年後の大正四年の秋、かねてから南画の好い作品を見たいと言っていた夏目漱石を案内して参りました。

庭園散策の後、池大雅、与謝蕪村、青木木米、田能村竹田など大家の数々の名品を鑑賞、再来を約し帰りましたが、まことに残念なことに漱石は翌年四十九歳という若さでこの世を去っています。

哲学者仲間では、阿部次郎、安部能成、谷川徹三などが、和辻に伴なわれ三溪所

蔵絵画の鑑賞に、あるいは茶会に再々来園しました。阿部次郎は、絵の鑑賞を思いの外楽しみに再々来園し、要件あつて来られなかった時には、まことに残念であったと日記に記しています。

谷川は、絵画の鑑賞会だけでなく、茶会にも再々来られて、蓮の花の咲く早朝に開かれた茶会を「生涯忘れえぬ茶会」として茶道関係誌などに度々記しています。茶室研究の第一人者堀口捨巳（建築家）も和辻と共に何度か来園、三溪の点前にて茶を頂いた際、同席の誰かに粗相があり名品と評される茶碗の端を欠いてしまい、客人の誰もが一瞬愕然としてしま

したが、当の三溪は泰然として、「茶碗を傾けてお使い下さい」と穏やかに言われ、何事もなかったかのように点前を続けられ無事茶会を終えました。このことで堀口は、三溪の悠然たる態度を称え、再々茶道関係書に紹介されました。

洋画家の岸田劉生も和辻とともに何度か来園、中国古画や南画の逸品を鑑賞絶賛しています。関東大震災の時、藤沢に居た劉生は、横浜全滅の知らせに、「……原、西郷両家と三溪園の無事を祈る……」と日記に記しています。

和辻の数多い著書のなか、今日に至るもなお広く愛読されている名著「古寺巡礼」は「昨夜出発前の僅かな時間に、Z君の所でアジヤンター壁画の模写を見せてもらった」という文章が始まります

が、このZ君は三溪の長男善一郎、処は言つまでもなく三溪園であり、和辻、原両家の夫人共々奈良京都の古刹探訪の際の記録をもとに書かれた作品です。

この旅行の最初の訪問先は三溪の妹幾恵の夫、古郷時待（富岡製茶場工場長の京都別荘でした。和辻はこの家をおみ、京都大学教授時代にはここから通いました。

その頃、京都の優れた家々を紹介した豪華本『京都民家譜』にてこの家は「……この邸ほど優雅、閑静な住居は他に比類があるまい……」と紹介されています。

近年「私の自慢の家」として、再々新聞雑誌等で紹介されるこの家には、現在同じ哲学者の梅原猛が住まっています。

川幡留司／三溪園保勝会参事



原三溪『二日遊閑記』(部分)。和辻哲郎、阿部次郎らと箱根芦の湯の別荘に宿泊したときの情景を描写。三溪園所蔵。



写真提供／岩波書店

和辻哲郎（わつじ・てつろう）●兵庫県出身。東京帝国大学卒業。ニーチェなど西欧の実存哲学を深く研究。日本人としての立場から人間と文化への考察を進めて独自の文化哲学を完成。わが国思想界に多大な影響を与えた。著書に『倫理学』『風土』など多数。文化勲章受章。

## 三溪園の公開と 社会貢献



野毛山老松町  
にあった原邸。  
三溪園所蔵。

### 自然の地形を生かした庭園造成

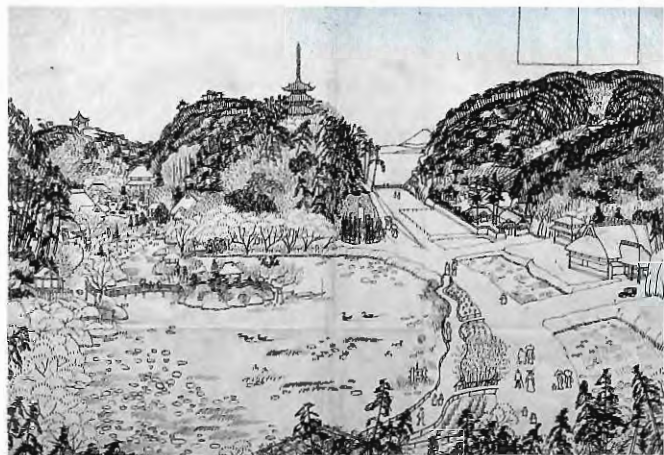
かつて、本牧三之谷ほんまきさんのかたは松や雑木が生い茂り、辺り一帯は荒涼とした沼地でありませんでした。この地に庭園を起したのが原善三郎です。善三郎には卓越した庭園趣味があり、生家埼玉の庭園を修築して、天神山という名園を造り上げたように、野毛の邸宅とは別に本牧のこの地を手に入れると、新たな庭園と別荘を築くことにしました。

明治三十二年（一八九九）善三郎没後は、三溪が本牧の庭園を引き継ぎます。野毛の邸宅は市長公舎に貸し出しましたが大正十二年（一九二三）の震災時に倒

壊したため、市の希望により庭園全体は茂木家庭園と合わせて野毛山公園としました。それに対し三溪園は、五万三〇〇〇坪の自然の雄大な地形を生かし、三溪が遠大な計画の下に修築した、ほとんど新設といってもよいほどの大造営です。

三溪は三溪園を修築しながら園内に自邸を設けますが、それは一般の富豪とは異なり豪華な御殿や西洋館ではなく、藁葺根の一見質素で何等の装飾もない田舎風でした。これは、日常生活に高雅な趣味を求める三溪自身の美的な精神の表れであり、それがもつとも顕著なのが三溪園の公開（明治三十九年）でした。

一木一石丹精を込めて手入れをした自



牛田雞村《三溪園全図》。北東から俯瞰するように描かれた。三溪園所蔵。

分の庭園に他人の散策を許すことは心理的にも並大抵なことではなく、維持経営上も公開すると否とは異なります。この点について三溪の次男良三郎は、「園内を荒らす入園者がいて困ると清掃人が不平をこぼすと、父はこれをなだめると同時に私共に向かって注意をうながし、三溪園の開放はかねてから相当の犠牲を覚悟していたことであるから、自分の死後も公開のことは永く継続してくれと戒めていた」と語っています。

横浜は新開の地で、伊勢山皇大神宮などを除けば市民に優雅な趣味を感じさせるような公園はなかったため、三溪園の名は横浜だけでなく、全国各地はもとよ

り海外にも響き渡りました。しかも、風景が美しいだけでなく、由緒ある古建築や歴史的にも美術的にも貴重な文化財が配置されています。それらは三溪が心血を注いだ蒐集品であるところが最大の特徴です。

### 不朽の古建築群

旧天瑞寺寿塔あまのぞうじのじゆたう覆堂◆明治三十五年（一九

〇二）三溪は豊臣秀吉ゆかりの堂を京都の大徳寺黄梅院から譲り受けて園内に移築しました。この堂は秀吉が母大政所の病氣平癒を祝って建てた石造の寿塔を覆っていたものです。重要文化財。

臨春閣◆覆堂移築で自信を得た三溪は秀





旧東慶寺仏殿。撮影／桜井ただひさ

（二四五七）天台宗の僧忍禪が東明寺と改称。現存する三重塔は、この時期のもので考えられています。総高約二五メートル。重要文化財。

**月華殿**◆三溪は聚楽第の一部と想っていたようですが、家康が伏見城に建てたと伝えられています。伏見城取り壊しの際に宇治の茶商上林家に下賜され、後に三室戸寺金蔵院に渡って客殿として使われていたところを大正七年（一九一八）三溪が移築しました。重要文化財。

**金毛窟**◆大正七年に新築した一畳台目の茶室で、床柱に千利休ゆかりの大徳寺山門金毛閣高欄の古材を使っているのです。この名があります。

**天授院**◆元は鎌倉建長寺近くに所在した心平寺の地藏堂と考えられています。大正五年（一九一六）に三溪園内に移築されました。重要文化財。

**聴秋閣**◆三代將軍家光が元和九年（一六二二）上洛の際、茶匠でもあった佐久間将監に命じて二条城内に造らせた楼閣です。後に乳母春日局に下賜したので、江戸稲葉侯邸（春日局の嫁ぎ先）にありましたが、明治十四年（一八八一）牛込若松町の二条公邸に移され、大正十一年（一九二二）二条厚基公の厚意により三溪園に移築されました。重要文化財。

**蓮華院**◆大正六年に新築した茶室で、土間中央にある円柱は宇治の平等院鳳凰堂



臨春閣。右は、移築前の臨春閣（『修理報告書』より転載）。ともに三溪園所蔵。

吉が聚楽第の一部として建てたと伝えられる「桃山御殿」を明治三十九年（一九〇六）譲り受け、大正六年（一九一七）園内に移築、完成します。ただし後の修理調査の結果、この建物は紀州侯徳川頼宣が慶安二年（一六四九）に建てた別荘蔵出御殿ではないかと考えられています。別荘はその後宝暦十四年（一七六四）取り壊しの際、大阪泉塚の豪商（食家）飯野左太夫に買われ、大阪春日出新田に移されますが、後に大阪で両替商を営んでいた清海家に譲られ、「八州軒」と称されます。移築後、三溪は臨春閣と命名、各部屋には狩野派絵師による襖絵および障壁画（現在は複製画を公開）、床の間

には螺鈿の地袋戸、庭には秀吉ゆかりの手水鉢などを見ることが出来ます。重要文化財。

**旧東慶寺仏殿**◆東慶寺は弘安八年（一七八五）北条時宗没後、妻の覚山尼により創建。仏殿は寛永十一年（一六三四）建立され、明治四十年（一九〇七）三溪園内に移築されました。重要文化財。

**旧燈明寺三重塔**◆元は京都府南の相楽郡加茂村燈明寺境内にあったものを大正三年（一九一四）三溪園内に移築しました。寺伝によれば、燈明寺は天平七年（七三五）聖武天皇の勅願によって創建され、貞観五年（八六三）清和天皇のとき再度勅願寺とされました。康正三年



大師会当日の三溪 (55歳)。三溪園所蔵。

した。狩野家伝来の弘法大師筆座右銘を手に入れた益田が、明治二十六年(一八九三)三月高野山から阿闍利を招いて報祭を行い、茶事を供養として催したのが始まりです。

その後鈍翁の発意で、三溪、団琢磨、根津嘉一郎の四人で順番に持ち回りで催すことになりましたが、大正十一年(一九二二)財団法人に改め、その持ち回りの第一回大師会が大正十二年、三溪園で行われることになったわけです。全国から美術愛好者が集まり、各自受け持ちの一室に陣取って自慢の名品を披露し、来賓をもてなしました。当日十八の茶席を受け持った主な席主は、園主三溪のほか益

田鈍翁、根津青山、森川如春、仰木魯堂、伊丹秀水、吉田梅毒、梅沢松庵、関西からは服部菜々堂、戸田露朝が加わりました。

このときの感想を、高橋箒庵は『癸亥大正茶道記』に「兎に角三溪園主が能く斯かる古建築物を保存して折々之を公共用に供し、今度の大師会にも奮って之を提供せられた其誠意に対しては、啻に大師会員のみなならず国家も亦相当の敬意を払って然るべきものだろうと思う」と記しています。

そのほかにも、昭和九年発行の小島一谿画、山本禾口文による『横濱百景』のなかで、「むかしサムライ商会の野村(洋三)さんは、外客に『僕の庭』を見せよ



春草廬。三溪園所蔵。

の古材とされ、壁の螺鈿が嵌め込まれた跡のある格子も同堂の戸の断片と伝えられています。

春草廬◆京都宇治の三室戸寺金藏院にあった月華殿に付属していた三畳台目の茶室で、織田信長の弟、有楽斎の作と伝えられています。九つの窓を持つので「九窓亭」と呼ばれていました。重要文化財。

### 三溪園の社会的貢献

三溪園の公開は日本の庭園史上、特筆すべきことでしょう。都市の人口増加に伴って公園の必要性が高まり、明治六年(一八七三)太政官布告によって公園制度が発足し、上野東叡山寛永寺ほか四カ

所が指定されました。次いで明治九年横浜公園が、外国人の要請によって新設されます。わが国初期の近代的な洋風公園としては、明治三十六年(一九〇三)に竣工した日比谷公園があります。昭和七年(一九三二)には、富士箱根ほか十二カ所が国立公園に指定されました。

三溪園が社会的に大変な評判を得た出来事として、大正十二年四月二十一日、二十二日にわたって行われた大師会があげられます。この大師会は益田鈍翁が弘法大師の徳を称えるために、命日に当たる三月二十一日自邸の品川碧雲台に各界の名士および美術愛好者を招待して、秘蔵品を見せ合いながら茶会を催すもので

うと三溪園へ連れて行った。横浜市民が三溪園を一種の誇りをもって見ている生きた証拠だ」「園主三溪氏の趣味人格をそのままに生まれて育ったこの名園に、市民の感謝と誇りを代表して『礼讃』の二字を捧ぐ」と称えられています。

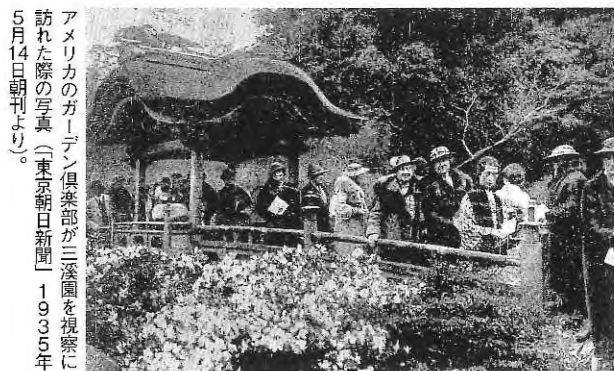
### 三溪園の国際的価値

芸術に高い理解を示す国民は常に尊敬され、指導的地位に立っていることを考へると、三溪の意思は日本の芸術を世界に紹介し、日本に対する認識と敬愛を高めることであり、その目的のために追られた三溪園は国際親善に大いに貢献したといえます。



詩聖タゴール (1861～1941) が昭和4年 (1929)、三溪園を訪れた際の写真。左から、野村洋三、三溪、タゴール、荒井寛方、ムクル・デ。野村弘光氏所蔵。

インドの詩聖タゴールが、大正五年(一九一六)五月に初来日しました。当時イギリスが警戒していた指導者を三溪園に三カ月近くも逗留させた三溪の心の広さは格別なものです。帰国の際タゴールは故国に設立した学校に日本画の教師を招きたいと話したので、三溪は荒井寛方(かほう)を推薦かつ出資援助してインドに留学させました。荒井寛方は後にアジャクスター壁画を模写して帰り、わが国美術界に大いに貢献しました。この時をふくめタゴールは五度来日しています。タゴールは三溪園滞在中三溪所蔵の美術品を見て非常に感激しますが、なかでも下村観山(かみづか)が院展に出品して評判になった《弱法師(かみづか)》を



アメリカのガイデン倶楽部が三溪園を視察に訪れた際の写真(『東京朝日新聞』1935年5月14日朝刊より)。

絶賛したので、三溪は荒井寛方に模写させて帰国の際持参してもらうことにしました。

ところで、第一次大戦以来アメリカは裕福になり海外への観光が盛んになりましたが、その旅行先の九割がフランスを中心としたヨーロッパでした。日本への観光客が少ないのは宣伝が不十分なためであるとして昭和五年、鉄道省に国際観光局が新設され、郵船会社や商船会社、満州鉄道、ホテル協会などが連携して対米広告共同委員会を設立するなど、日本は盛んに観光客誘致に努めます。その結果、欧米における日本文化研究が盛んになりました。

昭和十年(一九三五)五月、徳川家達(とくがわ)日米協会長の招待で、アメリカのガイデン倶楽部の代表一四〇名が大挙来日して、各地の名園を視察しました。秩父丸で横浜に入港した一行はただちに三溪園を訪問、このあと約二十日間日光、箱根、名古屋、京都、奈良など全国各地の名園及び景勝地を見学し、各地で歓迎のパーティに出席する旅程をこなし、帰国の途につきました。三溪園が日本上陸後の第一歩であったこともありますが、彼らの感想のなかで三溪園についての印象が異口同音によかったのは当然です。三溪園は国際的な社交場として重要な役割を果たしたといえます。

## 朝比奈宗源

〔一八九一—一九七九〕

鎌倉の円覚寺は原家の菩提寺ですの  
で、三溪在世当時日本仏教界において名  
僧として知られた円覚寺の釈宗演は、法  
事などで再々来園しました。また時折  
原家および知り合いの方々に原邸内の大  
部屋において仏法を説かれました。

明治四十二年の初夏、たまたま用件あ  
つて三溪園に見えておりました東京跡見  
学校二代校長の跡見桃子は、今夕三溪園  
にて宗演老師の法話があるからすぐ来ら  
れるよう跡見学校創立者の跡見花陰に電  
話にて連絡、早速来園しています。  
それほどまでに高僧の法話は有難いも  
のであったのです。

昭和二十八年、三溪園の管理が原家か  
ら財団法人三溪園保勝会に移行し、戦時  
中及び戦後に損傷した庭園および建造物  
の復旧工事が終了しました昭和三十三年、  
宗源は来園され、かつて原家の持仏堂  
であった天授院において三溪への竣工  
報告の法要が行われました。  
その折に宗源は三溪を称え、次の漢詩  
を作られました。

三溪旧苑復興成 古殿古楼水木清  
堪喜諸浜市民愛 永伝長者風流名

その後しばらくして、創立以来毎月三  
溪園で茶会を開催しております横浜茶道  
連盟で茶筌塚を園内に建てたいと申し出  
があり、許可しましたら、今度は題字の  
執筆者についての相談を受け、即座に宗  
源老師の名が上がりました。早速頼みに

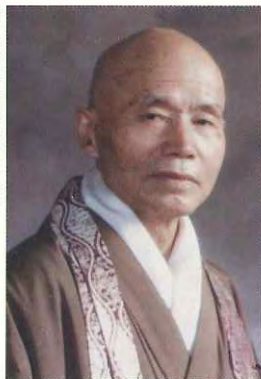
宗源は、鎌倉に来て間もなくこの宗演  
の侍者として再々来園、三溪の諸業績を  
見聞きし、よく知ることとなります。昭  
和十四年三溪が亡くなり、原家の跡を継  
ぎました良三郎は、三溪が描いた自筆の  
作品を『三溪画集』として、既に発刊し  
ておりましたが、長女の春子は、三溪が  
得意とした漢詩の詩集も出したいと数多  
い作品の整理と編集を宗源に依頼しまし  
た。この詩集は、『三溪集』の名で三溪  
の十三回忌法要の昭和二十六年の夏に出  
版されましたが、この詩集が完成する数  
カ月前に、企画した春子が急病で亡くな  
りましたことは誠に悲しい事でした。

訪れましたところ、折悪しく怪我をされ  
しばらく外出不可能にて、諸事お断りし  
いう状況でしたが、『三溪園』のことです  
からお断りするはずはありません。よく  
お出で下された」と大いに喜ばれ、三溪  
が関東大震災後の横浜市と生糸貿易の復  
興や大恐慌にて破綻した七十四銀行の整  
理には、まさに骨身を削って事に当たら  
れたことなどを延々と話され、「横浜の  
人は三溪先生のご恩を決して忘れてはい  
けません」と何度も述べられました。昭  
和五十年春、この茶筌塚は飛驒の合掌造  
旧矢筈原家住宅庭内に建てられ、除幕式  
の日には老師の傷まだ癒えず、老師のご  
配慮にて鎌倉瑞泉寺住職の上品豊直にお  
出で頂き無事執り行いました。

——川幡留司／三溪園保勝会参事



宗源の題字による茶筌塚（三溪園）。



写真提供／臨済宗浄智寺。

朝比奈宗源（あさひな・そうげん）●静岡県  
出身。京都妙心寺、鎌倉円覚寺での修行を  
経て、同寺系の浄智寺住職などを務め、昭和20年  
臨済宗円覚寺派管長。38年菅川豊彦、尾崎行雄  
らと世界連邦日本仏教協議会を結成し会長とな  
る。テレビの人気ドラマ「水戸黄門」「大岡越  
前」の題字の書家としても知られている。

## 日本美術の振興

高橋杏村《緑樹重陰・寒山行旅図》嘉永4年（1851）  
紙本着色 三溪園所蔵



## 古美術の研究

古来より古美術品は、永らく秘蔵されてきたものでしたが、明治期以降は蒐集家が増えて価格が高騰しました。この時代に一代で富を築いた実業家たちの多くは、名譽心や虚栄心から、あるいは利殖や相続対策として古美術品を蒐集したものです。しかし、三溪の蒐集態度はそのような富豪の蒐集癖とは違いました。そこには日本美術を振興させるためのひとつの理想があり、方針があり、主張がありました。

美術を学ぶには多くの古美術品を観察しなければなりません、自ら所蔵する

には誰しも財力に限りがありますし、そもそも買うためには鑑識眼が必要です。まだ欧米諸国のように博物館や美術館が広まっていなかった時代にあつては、旧藩主や貴族の家宝が公開される機会は稀でした。

三溪が美術を好んだのは、母方の祖父で画家の高橋杏村の遺伝もあつたでしょう。そして原家に入つてからは、古美術品の探索と購入に手腕を振るえるだけの巨万の資産に恵まれました。しかし書画骨董癖に向かわずに古美術研究に乗り出したことこそが三溪の重要な業績です。

三溪の古美術蒐集の特徴は、各時代、各流派を代表する傑作を蒐集したこと

です。画家の安田靉彦が語るところによれば、普通の数寄者なら自分の好みに偏るところ、三溪は自分の好まない流派のものでも時代を代表する傑作であれば蒐集したそうです。

一方、一度入手したものは安易に散逸させませんでした。大正時代には、旧藩主が経済的にやむを得ず、あるいは儲けを得るために展覧入札を開いて所蔵品を売り払うことが盛んにありました。しかし、大正九年（一九二〇）の大恐慌とその後、関東大震災、昭和二年（一九二七）以来の世界的不景気と蚕糸業の衰退を経ても、三溪はどのように利益を求めようとはしませんでした。

そして、所有する名画や名器を自分のために秘蔵することなく、友人知人や、画家・鑑定家を招いて共に研究しました。荒井寛方、安田靉彦、小林古径、前田青邨らが後年語っているところによれば、熱心に研究するあまり夜を徹することも珍しくなかつたそうです。

三溪の所蔵品のひとつである《孔雀明王像》（現在、東京国立博物館所蔵）は、明治三十六年（一九〇三）に美術品としては破格に高い一万円で大蔵大臣、外務大臣などを歴任した政治家、井上馨から譲り受けたことで知られています。

明治四十年代に三溪園を三回訪れた米国の鉄道事業家チャールズ・ラング、



後列右から2人目がフリーア、その隣が三溪。三溪園・待春軒にて。  
三溪園所蔵。



《寢覚物語絵巻》第二段 部分 平安時代後期 紙本着色・卷子 国宝  
大和文華館所蔵。

フリーアは、この絵を見て欲しくなり、古美術商をしていた野村洋三を通じて二五万ドルで譲り受けたいと申し込みましたが三溪はこれを謝絶。さらにフリーアが三五万ドルまで奮発するも、それも拒絶。そこで野村は、ただノーを押し通すのも味がないので、五〇万ドルなら承諾すると答えればフリーアも手を引くだろうと提案すると、三溪はそれも認めませんでした。当時は一ドルが二円。実業家なら一〇〇万円の資金を得たいところですが、三溪の古美術蒐集には営利的意図が少しもなく、むしろ国宝たる美術品の海外流出を防ぐ意図が勝っていたようです。

## 美術資料の集成

世の富豪が古美術品を集めるのは一般に独占欲を満足させるためであり、稀に古美術を研究する意思があっても個人的な研究に留まるものですが、三溪の場合は、広くその道の研究者に便宜を与えて共に研究するという志がありました。だからといって所有する美術品を誇示するわけではありませんから、三溪園の蔵を訪ねた者は少なからず好感を抱いたに違いありません。

たとえば、三溪の知人から紹介されて所蔵品の見学を希望する者があれば、三溪は快く受け入れました。次のような内

容の書簡が残っています。

突然ですがお願いがあります。フランス人のオフラックという、同政府の命により日本美術の調査に従事する者が、すでに岩崎、住友、藤田の各男爵の所蔵品を拝見しており、もし差し支えなければ今月二十五六日頃にあなたの所蔵品の拝見をお願いしたく、私から紹介申し上げます。誠に迷惑なことと存じますが、私がこれまでに見た外国の数寄者の中でも稀に見る程の趣味のある美術家であり、同人の最も好む品は古画と仏画です。先ずはお願いにて

原老兄

牧野仲顕のぶあき

このような依頼はきわめて多かったようです。しかも、東京、京都、奈良の博物館の希望に応じて貴重品を出品するなど、博覧会や展覧会で公開することも少なくなく、このほか新聞や雑誌への掲載なども厭いといませんでした。美術品の所蔵者といえば他見を惜しむのが常だった時代に三溪が公開に寛容だったことは、美術の発達を願うての犠牲的精神の発露といえるでしょう。

さらに三溪は、所蔵品のなかから画家以外の人の手による作品を集めた画集『余技よぎ』を出版しました。縦四〇センチ横三〇センチ弱の帙ちぢに四十一葉の図版が収められており、昭和十三年（一九三八）



《孔雀明王像》平安時代 絹本着色 国宝 東京国立博物館所蔵。  
Image:TNM Image Archives Source:<http://TnmArchives.jp/>

刊行、非売品で同好の士に贈呈されました。三溪が素人芸ともいふべき余技の逸品に着目して蒐集した識見はただならぬものです。そこに収録された作品には、宮本武蔵筆《布袋見聞鶏図》や水戸黄門光圀筆《布袋》、赤穂義士として知られる大石良雄筆《翡翠》などがあります。じつはこれより以前にも三溪が出版を計画した画集がありました。これまで集めてきた国宝や重要美術品に指定された所蔵品を取り上げ、三溪自ら解説文を付したものでしたが、残念ながら印刷製本完了後に関東大震災で焼失してしまいました。それは『三溪帖』と呼ばれるもので、草稿は今も残されています。

『三溪帖』および『余技』の出版の真意を推し量り、三溪の次なる念願を想像するならば、三溪園の地に、美術館を建設して秘蔵の美術品を公開することだっただろうと思えてなりません。

## 新進画家の後援

一般に美術愛好家は古美術品を集めて歎美するもので、評価の定まらない新時代の美術家に着目することは少ないのが普通です。しかし美術を継承する者への国の保護や個人の後援がなければ、美術の振興を期待することはできません。

明治に入り西洋文化が急激に流入し、古美術が顧みられなかった時、岡倉天心

は先覚者として東京美術学校の創立を実現し、さらに明治三十一年（一八九八）に日本美術院を創設して新興美術を先導しました。同じように三溪が新美術に注いだ努力は顕著なものでした。三溪は橋本雅邦の門下である下村観山を招いて本牧和田山の土地を贈与して邸宅を構えさせ、美術研究の友としました。また、仏画に秀でた荒井寛方を後援して、インドに遊学させるなど、その熱意は並々ならぬものでした。

明治四十五年（一九一〇）ころより安田靉彦、今村紫紅は三溪園に通い、その翌年からは小林古径、前田青邨、そして横浜に住む牛田雞村らも出入りするよう

になりました。三溪はこれらの青年画家に毎月物質上の援助を約束し、長期間にわたり後援しましたが、今村紫紅は惜しくも大正五年（一九三六）に三十七歳で没しました。

三溪の愛好する古美術は、藤原時代から奈良、飛鳥時代にまで遡り、あるいは明、元、宋、唐から古代にまで及んでいましたが、一方で橋本雅邦をはじめ横山大観、下村観山、さらに川合玉堂、菱田春草、西郷孤月ら新進画家の傑作を愛蔵していたことから、日本美術振興の精神を窺い知ることができます。

三溪の熱意は、それぞれの画家が残している言葉にも表れています。前田青邨



荒井寛方《竹林の聴法》明治44年（1911）絹本着色 双幅  
三溪園所蔵。



今村紫紅《伊達政宗》明治43年（1910）絹本着色  
軸 横浜美術館所蔵。

きいところがありました」

荒井寛方はこう記しています。

「藤原時代の名作《孔雀明王像》の模写を国華社が申し出ると、原氏は快く承諾されました。私はその模写を担当することになり、二カ月あまり三溪園の山の上の別荘に泊まっていたとき、原氏が『模写ばかりではなく自分の絵も描いてみてはどうか。物質上の援助はするから』とおっしゃった。私が逡巡していると、『物質の援助というのは君個人ではなく、日本の画道のために世話をしたいからだ』と言ってくれました。私の前には新しい道が開けた、原氏の識見に背かぬ技道精進を固く心に誓いました」

は次のように書き記しています。

「私や安田鞞彦、小林古径、今村紫紅ら当時の青年画家は、平均してひと月に一、二回は三溪園に集まり、原さんが買い求められた古画などを見せてもらって意見を出し合っていました。原さんが画家の保護者としてではなく、全く専門の画家のように芸術を論ぜられたことに感服しました。われわれは一泊どころか、二泊も三泊もして、原さんと芸術を語ったものです。原さんは自分の商売や仕事のことを何かの拍子に語るようなところは少しもなく、また画の批評で意見が衝突し、自分の意見が間違っていたと気付くと、深く自分の意見を撤回するような大



## 鈴木達治

〔一八七二—一九六一〕

横浜国立大学の構内に高さ六メートル六〇センチの「名教自然碑」があります。これは同大工学部の前身、横浜高等工業学校初代校長鈴木達治自筆の碑にて、昭和十二年、同校のあった横浜市南区弘明寺の同校本館前に<sup>まも</sup>建て立っていました。

この碑は、同校正門を入ってすぐ真正面にありましたので学生の誰もが毎日行き帰りに仰ぎ見ることが出来ました。

また、門の外からも眺められましたので地元の人々もこの碑を知らない人はないという程に親しまれていましたが、昭和五十三年、同校の保土ヶ谷区常盤町への移転に伴いこの碑も移されました。

実は、この碑を仰ぎ見ながらも、ほとんどの人が気付かない背面に、徳富蘇峰の鈴木校長の功績を称えた撰文が原三溪の楷書体にて彫り込まれていて、平成十四年国の登録有形文化財に指定されました。

この碑が建てられました二年後に原三溪は七十歳の生涯を閉じ、原家の久保山墓地に葬られました。その広い墓地を訪れる誰しもが、その一画に横浜高等工業学校初代校長鈴木達治と二代校長富山保の名で建てられた「三溪原先生之碑」を目にするとは何故、横浜高等工業学校がこの地に、しかもこのような立派な碑を建

鈴木達治（すずき・たつじ）●愛媛県出身。東京帝国大学卒業。東京高等工業学校教授等を経て、横浜高等工業学校（現横浜国立大学工学部）初代校長。教育者として名を成す。とりわけ三無主義教育（無試験・無採点・無賞罰）を実施したことで知られる。



写真提供／横浜国立大学。

てられたのかと不思議に思います。

このお二方は、大正五年原合名会社が<sup>たかた</sup>他社に先がけ空中窒素・人造絹糸等の研究をするために設立された「密密（セイミシ）化学」研究所の所長と主任研究員でした。成果を上げ、将来が大いに期待されましたが、折悪しく不運が相次いで発生しました。第一次世界大戦、それに続く世界的大恐慌による生糸価格の暴落、引き続いて起きた関東大震災により大被害を受けました際、三溪は、自社のことよりも公の横浜市及び生糸貿易の復興の方を優先し、両方の復興协会会长としてその復興に全力で尽くされましたので、同研究所もやむなく閉鎖することになりました。

関東大震災で横浜高等工業学校も全

壊、再建の見通しつかず文部省から同校は廃校とし、名古屋の高等工業学校に移すという指示がありました。

この時前述の両名は三溪に相談、即原合名会社の無事であった建物を使って横浜高等工業学校は授業を再開するなど同校存続への懸命の努力がなされました。ほどなく熱意が受け入れられ廃校案は立

消えとなりました。

前述の横浜高等工業学校建設の碑の一文を紹介すると「……関東大震災は横浜を一挙に灰燼<sup>かいじん</sup>に帰せし三溪先生身を挺し市民の先頭に立ち復興大事業を成就したり、我校も其の恩沢に浴すること多し……」と記されています。

——川幡留司／三溪園保勝会参事



名教自然碑。昭和12年、鈴木達治の功績を顕彰して建立された。

# 公人としての三十年

猿渡 紀代子

横浜美術館特任研究員・原三溪市民研究会顧問



《白雲心》紙本墨書 30.0×61.8cm 「白雲」という言葉を好んでいた三溪の書。禅語で「白雲自去来」「白雲流水清」という言葉があり、白雲は自由闊達な様子や、無心でこだわらない清々しさを表している。三溪園所蔵。

## 「唯<sup>ただ</sup>有<sup>ある</sup>義<sup>の</sup>耳<sup>のみ</sup>」の精神

原三溪の公共貢献は多岐にわたり、さまざまな分野にまたがっています。自ら経営する生糸輸出業にかかわる蚕糸業界での奔走、横浜経済界の命運を左右する七十四銀行の破綻に際しての救済、関東大震災後の横浜復興における大役、さらに三溪園の造園と一般公開、若い画家たちへの支援と作品購入（コレクション形成）を通しての日本美術振興まで、きわめてスケールの大きな公共貢献です。

三溪をこのような公共貢献に駆り立てたもの、それらを完遂するに必要な不屈<sup>ふく</sup>の精神は、どこから生まれてきたの

か、あるいは、三溪の公共貢献を支えた人生哲学はどのようなものであったのか、三溪という多面的な人物像を貫く軸、人間性の核をなすものは何であったのか、そして彼の公共貢献はどのように継承されたのかを概観して、本書のエビローグとします。

\*

昭和八年（一九三三）、三溪が六十五歳のころに執筆したとされる「随感録」は、実業家として公共事業や企業経営を回想した未刊行の手記です。その冒頭には、「公人としての三十年」という見出しのもとで、公共の事業に当たって心がけていた三つの行動指針が記されています。

(一) 公人として自己の功名と利益とを求めてはいけないこと

(二) 責任と危険が多く、皆が躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>して避けようとするので、いわゆる割の悪い仕事、しかも公共に必要なことがある場合には、自分は奮<sup>ふる</sup>って一身を犠牲にしてこれを引き受けるべきであること

(三) 平素なるべく雑多の公職を避け、精力と時間との余裕を貯え、一朝事あるに当たっては自己の全精力、全時間を傾注してその事の達成を期すること

三溪が自己に課したこの三項目は、彼の人生観をみごとに凝縮しています。加えて、人間は自然に備わった徳の高さ「天爵」を貴ぶべきで、人が定めた荣誉「人爵」

を望むのは功利の徒であるとの信念は、十六、七歳頃に郷里の師から教えられたものでした。現在三溪園が所蔵する扁額「唯<sup>ただ</sup>有<sup>ある</sup>義<sup>の</sup>耳<sup>のみ</sup>」は、三溪が亡くなるまで会長を務めた神奈川県<sup>けんとう</sup>済会<sup>きうかい</sup>に掲げられていたものですが、「孟子」の「惟義所在」に由来すると思われ、「正義の基準に照らして行動すること」を意味しています。三溪はこの言葉を心に銘じて、事に当たって忘れまいと誓ったといえます。

こうした信条と信念をもつ三溪であればこそ、危機に際して奔走し、救済に力を尽くし、かつ成功に導いたことが理解されます。しばしば要職への就任要請を受けながら、自らはできるだけこれを避

けて、適材適所の人材を推薦したことも、確固とした姿勢によるものでした。藤本實也が三溪周辺の多数の人びとに取材するなかでその一端が明らかになったように、数々の善行を重ねながら一切それを口にする事のない「陰徳」の人でもありました。

さらに、三溪は「随感録」に記しています。「余は天下国家の大器にあらず。……徒に空理空論に終らんより、其実行し得る範囲に於て其力を尽すべきを期せり。余は横濱に住み横濱に生存の恩を荷へり、左レバ横濱に必要な事件に精力を集注し横濱に対する生活の恩共同生活の恩に万一を報ぜんと決せり」。貴族院

議員となることや中央経済界への招聘を固辞し、「横濱市の大恩人」となった三溪は、心中このように決意していました。

### 三溪の人間像

ある人が尊敬する歴史上の人物や、私淑する同時代人を知ることが、その人自身の姿を明らかにしてくれます。三溪は徳川家康を日本の歴史上最大の人物と高く評価していました。家康は、天下を取るまでに波乱万丈であったが、順境であれ逆境であれ、その時々で実によく考えて対処していたので、どのような境遇になっても必ず教えられるところがあると三溪は語っています。同時代人では、洪

沢栄一に近いものがありました。三溪が旨としたのは「人と争わず、人を苦しめず、人を楽しませることを自らの楽しみとする」ことであり、「人に譲り、人に同情し、さらに進んで人を救う」ことでした。この美点は、「名声を求めない」とことも併せて、洪沢栄一の人間像とつながるものでした。

晩年の三溪は、東北旅行（一九三〇）を楽しみ、益田鈍翁や松永耳庵らを招いて茶事を催し、生地岐阜への里帰りの折や、京都や伊豆長岡など別荘での滞在中にも、漢詩をつくり、絵筆を離しませんでした。しかし、昭和十二年（一九三七）長男善一郎が四十六歳で急逝したことは、



三溪の葬儀（臨春閣住之江の間・昭和14年8月）。三溪園所蔵。

三溪にとって痛恨の極みでした。矢代幸雄は、蒼白の顔面に白い羽二重の長衣を着て悄然とした三溪の姿を伝えています。その二年後には、伝雪舟の《四季山水図（山水小巻）》を枕元において鑑賞した後、三溪自身がこの世を去りました。

葬儀の際には、園内の蓮の花だけが棺の前に飾られました。横濱市議会はすぐに生前の功績に感謝する決議を行い、その感謝状には「市政の君に負ふ所頗る多く、市民の信頼世の常を絶す」と記されました。「原さんは表面に出ることを好まず、常にその力を内に蓄えていた。しかし一朝何事あるときは、内に蓄えた真の力を遺憾なく発揮された」。盟友中

村房次郎の追悼談は、三溪の人間像を鮮やかに伝えています。

### 三溪園の継承

三溪が私邸である三溪園の外苑を市民に無料開放したのは、明治三十九年（一九〇六）、三十八歳のときでした。それは三溪の公共貢献の中で最たるものでしょう。戦争中に荒廃した園を整備復元するため、昭和二十八年（一九五三）に財団法人三溪園保勝会が発足し、開園から百年以上を経た今も三溪園は多くの人びとを引きつけています。

地元横濱では、慶応二年（一八六六）の大火（豚屋火事）を契機として、明治



左／鶴翔閣から眺めた三溪園の景観（明治末から昭和4年）。三溪園所蔵。  
右／鶴翔閣。三溪園所蔵。

九年（一八七六）、居留地と日本人町の境界にわが国初の洋式公園（現在の横浜公園）が開園しています。また、明治中期ころから、野毛山の原善三郎邸に隣接した茂木惣兵衛の別荘では、毎年秋に無料の観菊会が行われ、横浜名所となっていました。こうした先例があるなかで、次世代にわたってまで相当の覚悟を要求される三溪園の開園の決心を最も強く支えたのは、次に見るような三溪自身の考え方、自然観でした。

三溪（三之谷）の土地は確かに自分のものであるが、その明媚な風景は造物主の領域に属し、自分の私有物ではない。三溪園は、自然の風景を利用してその大

部分を構成しているもので、公開するのはむしろ当然の義務であると考えたのです。ここには、三之谷の地形を存分に利用した庭造りという原三溪の造園の理念も表明されています。

### 美術コレクションの継承

大正五年（一九一六）タゴールが三溪園に二カ月半も逗留したときに通訳をつとめた矢代幸雄（一八九〇～一九七五）は以後、三溪園に出入りするようになり、後年美術史学者として大成し、著書『芸術のパトロン』（一九五八）のなかで原三溪の美術面における貢献について詳述しています。矢代は原三溪を「真の芸術

残した矢代が、東洋美術史の研究にも向かい世界的な視野から「日本美術の特質」（一九四三）を著した原点には、原三溪との出会いがありました。戦後、わが国の文化財保護行政を担った矢代は、奈良の大和文華館の初代館長となり、原三溪コレクションのうち『寝覚物語絵巻』（国宝）や尾形光琳《扇面貼交手筈》（重要文化財）など重要な古美術品を同館に収蔵しています。

松永安左エ門（号耳庵、一八七五～一九七一）は、益田鈍翁、三溪と並んで「近代の三大数寄者」と称される実業家です。三溪に傾倒して「光悦にも比肩すべき大茶人」であったと礼賛し、人間

性が滲み出た三溪の茶の湯について、著書のなかで言葉を尽して紹介しています。鈍翁から三溪に贈られた箱根の別荘白雲洞は、三溪没後の翌年、原家から耳庵に贈呈され、現在では強羅公園内で一般公開されています。

総数五、六〇〇点は下らないといわれる三溪の美術コレクションは『孔雀明王像』など多くの国宝や重要文化財を含んでおり、戦後になって前述の大和文華館をはじめ東京・京都・奈良の国立博物館、富山記念館、出光美術館、五島美術館、福岡市美術館などに収蔵され、横浜では三溪園と横浜美術館が所蔵・展示しています。

パトロン」と呼び、「古美術をして古美術たるに終らせずに、これをもって新時代を養うところの心の糧とし、技術の模範として役立たせた」として高く評価しています。

ルネサンス美術の研究で大きな足跡を



白雲洞の仏間に飾られた鈍翁、三溪、耳庵の遺影。左は、大文字山に向かって眺望が得られるように増築された広間・対字齋。



三溪の文化面における事績は、彼に傾倒し感化を受けた人びとを通して、確かに引きつがれて今日に至っています。三溪園の恒久的な保存は、庭園と古建築の価値を未来へと伝えるだけでなく、創設者三溪の精神を継承し生かすことにつながるでしょう。そして、三溪の多面的な公共貢献が、今後のさらなる検証によって歴史的な位置づけを与えられることを願ってやみません。

最後に、三溪が明治三十五年（一九〇二）から三十六年間にわたって経営した富岡製糸場の現在について触れておきます。富岡製糸場は、三溪が人物を見込み、製糸家としても信頼していた片倉兼太郎

（初代および二代）の片倉製糸紡績株式会社、昭和十三年（一九三八）経営委任され、翌年同社と合併しました。昭和六十二年（一九八七）に製糸工場として幕を閉じた後も、敷地と建物は保全され、平成十七年（二〇〇五）富岡市に移管されました。現在、絹関連の産業遺産とともに「世界遺産」としての認定をめざして、地道な市民活動が続けられています。

二〇一一年はタゴール生誕百五十周年に当たりますが、三溪の援助でインドに渡った荒井寛方による「村親山」《弱法師》の模写はタゴール国際大学に所蔵され、今後の日印交流の進展を照らす歴史的な証人であり続けることでしょう。

## 原三溪とその時代 ● 年表

〔横〕は横浜関係 〔国〕は国内関係  
年齢は満年齢

文久2年 (1862)  
慶応4年 明治元年 (1868)  
明治2年 (1869)  
明治5年 (1872)  
明治6年 (1873)  
明治7年 (1874)

原善三郎が弁天通3丁目に原商店(牛糸売込業)を開業。

8月23日 美濃国厚見郡佐波村青木久衛ことの長男として生まれる。

〔横〕原善三郎ら横浜の豪商たちにより横浜為替会社設立。

近所の東光寺、観音寺子屋に通う(明治6年まで)。

〔横〕9月 東京(新橋)横浜間鉄道開通。

〔国〕10月 官営富岡製糸場開業。

11月 国立銀行条例発布。徴兵の詔書。

〔横〕6月 横浜に生糸改会社開業。

〔国〕11月 内務省設置。

佐波村の小学校尚文義校に入学。

〔横〕8月 横浜為替会社を第一国立銀行に組織変更。

明治10年 (1877) 9歳  
明治11年 (1878) 10歳  
明治13年 (1880) 12歳  
明治14年 (1881) 13歳  
明治15年 (1882) 14歳  
明治16年 (1883) 15歳

〔国〕2月 西南の役。

外祖父の画家高橋吉村の長男、高橋鎌吉(号杭水)に絵を学ぶため母の実家神戸村まで週に一度通う。

〔横〕7月 第七十四国立銀行開業。

日置江村の三余私塾に入り青木東山に

日本および中国の歴史を学ぶ。

〔横〕2月 横浜正金銀行開業。

4月 横浜商法会議所設立(会頭 原善三郎)。

〔横〕6月 横浜連合生糸荷預所設立。

父久衛より薄茶を学ぶ。尚文義校より

大垣の野村藤蔭の鴉鳴塾に移り、漢詩漢文を学ぶ。

〔国〕10月 日本銀行開業。

三余私塾に再入塾する。

明治17年 (1884) 16歳  
知人をたよつて京都に出、草場船山に経学詩文を学ぶ。

明治18年 (1885) 17歳  
4月 東京に出、東京専門学校(早稲田大学の前身)で政治法律を学ぶ。  
〔横〕12月 横浜税関新築落成。  
〔国〕12月 内閣制度を設置。第一次伊藤内閣成立。

明治19年 (1886) 18歳  
〔横〕3月 横浜蚕糸元込商組合設立。  
10月 市中から居留地まで水道敷設は完了。

明治21年 (1888) 20歳  
跡見花蔭を紹介され東京・跡見学校の漢学と歴史の助教師となる。

明治22年 (1889) 21歳  
〔横〕4月 市制実施。横浜区が横浜市となる。  
〔国〕2月 大日本帝国憲法発布。

明治23年 (1890) 22歳  
〔横〕9月 横浜に電灯点灯。  
〔国〕7月 第一回衆議院選挙。

明治24年 (1891) 23歳  
7月 原善三郎養嗣子元二郎長女屋寿と結婚。  
〔国〕5月 ロシア皇太子大津にて切りつけられ負傷。

明治25年 (1892) 24歳  
1月 原家へ養子入籍。  
4月 長男善一郎誕生。

明治26年 (1893) 25歳  
この頃書画骨董を購入し始める。  
〔横〕8月 横浜生糸合名会社創立。

明治27年 (1894) 26歳  
1月 長女春子誕生。  
〔横〕2月 横浜築港棧橋完成。  
〔国〕8月 日清戦争。

明治28年 (1895) 27歳  
〔横〕9月 横浜商業会議所設立(元頭 原善三郎)。  
〔国〕4月 日清講和条約調印。

明治29年 (1896) 28歳  
1月 横浜市弁天通3丁目50番地に分家する。  
7月 次男良三郎誕生。  
〔横〕8月 横浜生糸検査所設立。  
10月 第一国立銀行第一銀行に改称。

明治31年 (1898) 30歳  
〔横〕4月 第七十四国立銀行、横浜七十四銀行に改称。

明治32年 (1899) 31歳  
2月 原善三郎死去(享年72)。  
3月 日本美術院の名譽賛助会員となる。  
この頃から岡倉天心らと交際が始まる。

明治33年 (1900) 32歳  
生糸元込業の他に生糸輸出部を創設。  
リヨン・ニューヨーク、モスクワに代理店を置く。  
2月 原商店の組織を改め、原合名会社とする。  
10月 次女照子誕生。  
〔国〕9月 立憲政友会結成。

明治34年 (1901) 33歳  
生糸輸出に着手、原輸出店を独立させる。

明治35年 (1902) 34歳  
1月 第一銀行頭取に就任。ロシアに初めて玉糸を輸出し、対露生糸貿易を起す。  
9月 富岡、名古屋、大磯、四日市の製糸場を三井家から譲り受ける。  
この頃より先代善三郎の購入した土地を買い足し、三溪園の周辺地区の開発とともに、田畑や湿地を埋め立て三溪園の造営に大きく着手する。  
住居とする鶴翔園を建てる。  
〔国〕1月 シベリア鉄道開通。

明治36年 (1903) 35歳  
仏画《孔雀明王像》を高橋帯庵の紹介で井上馨から買い入れ、この頃から古美術の収集にいつそう熱中する。  
〔横〕11月 日本輸出絹物同業組合連合会設立。

明治37年 (1904) 36歳  
〔国〕2月 日露戦争。

明治38年 (1905) 37歳  
〔横〕11月 横浜輸出協会設立。  
〔国〕9月 日露講和条約調印。

明治39年 (1906) 38歳  
4月 勲四等に叙せられる。  
5月 三溪園外苑を開園、無料開放する。  
10月 ロシアに生糸輸出を始める。

明治40年 (1907) 39歳  
4月 アメリカの実業家フリーアが、野村洋三の紹介で来園し三溪園の美術品を鑑賞する。  
〔国〕10月 文部省美術展覧会初めて開催。

明治42年 (1909) 41歳  
〔国〕10月 三井合名会社設立。  
伊藤博文ハルビンで暗殺。

明治43年 (1910) 42歳  
4月 高橋是清内閣の生産調査会委員に任命される。  
〔横〕3月 横浜蚕糸外四品取引所と横浜株式米穀取引所合併し、横浜取引所と改称。  
〔国〕5月 大逆事件。  
8月 日韓併合。

明治44年  
(1911) 43歳

2月 恩賜財団済生会理事に就任。  
3月 原敬を三溪園に招く。  
9月 下村観山へ作品依頼。

11月 岡倉天心を通じて安田毅彦へ今村紫紅、小林古徑、前田青邨の援助を始める。

1月 父青木久衛死去(享年77)。  
この頃より日本美術院の新進画家を招き

三溪園で古美術鑑賞研究会が開かれる。  
[国] 1月 中華民國臨時政府成立。

大正2年  
(1913) 45歳

1月 所蔵品の美術品展覧会を行う。

4月 日本夏麗株式会社を設立。

5月 長女春子西郷健雄と結婚する。

10月 生糸検査所にて所蔵絵画展覧会開催。

12月 下村観山が三溪の援助で本牧和田山に転居する。

大正3年  
(1914) 46歳

2月 今村紫紅が三溪から援助金を  
1年前借りしてインドへ取材旅行に出かける。

9月 日本美術院再興に際して賛助員兼評議員となる。  
この年原台名会社モスタワ支店を閉鎖。

[国] 7月 第一次世界大戦勃発。

大正4年  
(1915) 47歳

3月 帝国蚕糸株式会社(第一次)社長となり、  
蚕糸業救済に尽力する。

[国] 11月 第一次世界大戦終結。

岐阜県神戸町善学院境内に  
母方祖父高橋杏村のため石碑「彰徳碑」を建立。

大正8年  
(1919) 51歳

9月 帝国蚕糸株式会社設立(第二次)専務に就任。  
横浜倉密研究所設立。

11月 株式会社三井銀行取締役に就任。

片倉製糸紡績株式会社顧問に就任。

12月 横浜興信銀行設立し頭取就任。  
この年白雲邸を建く、夫人と二人の住まいとする。

[横] 5月 七十四銀行破綻。

5月 大日本蚕糸会理事となる。

紺綬褒章を受ける。内閣経済調査会委員となる。

12月 株式会社南和公司を設立。  
この年益田純翁より箱根強羅の別荘白雲洞を譲られる。

大正11年  
(1922) 54歳

1月 善一郎渡欧。

4月 神奈川県社会事業協会会長に選出。

4月 内苑の完成を記念して大師会茶会を開く。

9月 横浜貿易復興会会長に就任。

[国] 9月 関東大震災。

大正12年  
(1923) 55歳

大正5年  
(1916) 48歳

4月 益田純翁が御殿山で催した大師会で、  
禅居庵を担当。  
6月 三溪の助力により横浜公園内社交倶楽部で  
第2回赤曜会が開催される。  
11月 従五位に叙せられる。大崎製糸場を閉鎖する。

2月 日本リネット株式会社設立。

3月 横浜蚕糸倶楽部の幹事長となる。

4月 大隈内閣の経済調査会委員に任命される。

6月 タートル来園し、3カ月近く滞在。

7月 勲三等瑞宝章を受章。

秋、臨春閣の移築が完了。

9月 次女照子が原太三郎と結婚。

11月 長男善一郎が団琢磨四女寿枝子と結婚。  
この年原台名会社ニューヨークとリヨンに支店を置く。

[横] 11月 横浜港第2期拡張工事完了。

[国] 3月 ロシア革命。

4月 朝鮮農林株式会社設立。

[横] 6月 横浜七十四銀行、七十四銀行に改称。

7月 雑誌「シルク」創刊。

11月 全国蚕糸業大会を横浜で開く。  
帝国蚕糸組合成立。

大正13年  
(1924) 56歳

4月 帝国経済会議員に任命される。  
日本絹業組合復興会会長に選出。

6月 震災の復旧が竣工し三溪園を再開園する。

11月 日本郵船株式会社取締役に就任。

大正14年  
(1925) 57歳

4月 横浜市信用組合長となる。

真崎大和鉛筆株式会社を設立。

5月 保証責任横浜市復興信用組合長に就任。

6月 南満州鉄道株式会社監事に就任。

7月 大日本蚕糸会顧問となる。

[国] 5月 普通選挙法公布。

大正15年  
昭和1年  
(1926) 58歳

3月 横浜臨時港湾委員会委員となる。

9月 金融制度調査会臨時委員となる。

12月 株式会社南域公司を設立。

昭和2年  
(1927) 59歳

6月 蚕糸委員会委員となる。

10月 生糸検査所にて所蔵日本画展開催。

[横] 10月 区政実施。

[国] 3月 金融恐慌始まる。

昭和3年  
(1928) 60歳

4月 第二銀行を横浜興信銀行に合同。

12月 次男良二郎が松平慶雄妹会津子と結婚。

[横] 4月 日米生糸格付技術協議会開催。

- プロローグ…三溪原富太郎の生い立ちと実業家への道／廣島 亨
- 第1章…蚕糸業における功績／速水 美智子
- 第2章…七十四銀行の破綻と横浜興信銀行の誕生／築比地 規雄
- 第3章…関東大震災からの復興／小林 一彦
- 第4章…公共事業の援助と震災復興整理／小林 一彦
- 第5章…横浜の大御所として／藤嶋 俊會
- 第6章…三溪園の公開と社会貢献／藤嶋 俊會
- 第7章…日本美術の振興／久保 いくこ
- エピローグ…公人としての三十年／猿渡 紀代子
- 年表…原三溪とその時代／宮崎 朋子

### 原三溪市民研究会のご紹介

原三溪市民研究会は、原三溪の没後70年と横浜開港150周年を記念して、藤本實也著『原三溪翁伝』を出版することを目標に、2007年9月から活動をスタートしました。三溪園(財団法人三溪園保勝会)と横浜美術館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)の主導で、市民メンバーを募集し、内海孝教授(東京外国語大学教授・大佛次郎記念館研究員)の指導下で、64年間眠っていた幻の原稿を読み解き、索引を作成して2009年11月に『原三溪翁伝』を刊行しました。同書は、財団法人はまぎん産業文化振興財団の助成を得て出版され、県内各地の公立図書館、大学や専門機関に寄贈されています。

2010年度から、市民メンバーを中心とする体制を整えた市民研究会は、現在も『原三溪翁伝』の輪読会や三溪の足跡を訪ねるスタディツアーなどの活動を続けています。2010年4月にホームページ(www.harasankei-kenkyukai.com)を開設し、「三溪を学ぶ、三溪に学ぶ」をコンセプトとして、随時会員を募っています。群馬や茨城、山形、岐阜からの参加者を含め毎月1回30名ほどが楽しみながら、調査研究や発表、議論を深めています。

#### 『原三溪翁伝』の内容

- 著者●藤本實也  
 編者●財団法人 三溪園保勝会・公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団  
 発行●株式会社 思文閣出版  
 判型●A5判(箱入り)  
 頁数●952頁  
 構成●三篇  
     (第一篇 事業と生涯)  
     (第二篇 公共貢献)  
     (第三篇 性格と趣味)  
 定価●16,000円(税別)



昭和4年 (1929)	61歳
昭和5年 (1930)	62歳
昭和6年 (1931)	63歳
昭和7年 (1932)	64歳
昭和9年 (1934)	66歳
昭和10年 (1935)	67歳

- 神奈川県巨済会会長に就任。  
 9月 子安製糸研究所を設立。自動操糸機の開発。  
 〔横〕4月 横浜市復興祝賀会。  
 3月 蚕糸委員会廃止。  
 6月 『三溪画集』第一集自費出版。  
 秋、中村房次郎と東北旅行をする。  
 〔国〕9月 満州事変。  
 11月 所蔵の『孔雀明王像』『閻魔天像』『一遍上人絵伝』『国宝』当時』に指定される。  
 〔横〕5月 横浜生糸市場暴落。  
 〔国〕5月 五・一五事件。  
 3月 復興記念横浜大博覧会評議員となる。  
 6月 弟武雄死去(享年50)。  
 夏、土 指腸潰瘍で療養。  
 〔横〕4月 ジャーデインマゼソン商会閉店。  
 11月 所蔵の古美術品『寝覚物語絵巻』ほか5点重要美術品(当時)の指定を受ける。  
 〔横〕3月 復興記念横浜大博覧会開催。

昭和11年 (1936)	68歳
昭和12年 (1937)	69歳
昭和13年 (1938)	70歳
昭和14年 (1939)	

- 4月 名古屋製糸所の操業中止。  
 原合名会社上海支店を設置。  
 〔国〕2月 二・二六事件。  
 8月 長男善一郎死去(享年46)。  
 12月 渡瀬工場閉鎖。  
 〔国〕7月 日中戦争勃発。  
 〔横〕3月 七十四銀行業務廃止、七十四商事に商号変更。  
 1月 生母青木こと死去。  
 『余技』自費出版。  
 12月 肺炎にかかる。  
 後鳥羽天皇七百年祭に数点の美術品を宮中に献じる。  
 病床にあることが多くなる。  
 7月 中旬より腸疾患が再発。  
 8月16日 三溪園自宅にて死去。正五位に叙される。  
 〔国〕9月 第二次世界大戦勃発。

- 参考資料  
 三溪園100周年 原三溪の描いた風景 三溪園保勝会編 神奈川新聞社刊 2006年。  
 『原三溪翁伝』原三溪年譜 藤本實也著 思文閣出版 2009年。  
 『近代日本総合年表』第四版 岩波書店 2001年。  
 『横浜近代史総合年表』有隣堂 1989年。



当財団は、産業と文化の両面から地域の皆さまの生活の充実と向上に寄与することを目的として、昭和六十三年に横浜銀行の創立七十年記念事業の一環として設立されました財団法人です。主たる事業活動は、つぎのとおりです。なお、ホームページでもご覧いただけます。

### 一 中小企業青年従業者の海外派遣事業

「神奈川県中小企業技術者等海外派遣団」と「神奈川県商業従業者海外派遣団」を欧州各国への視察研修に派遣をしております。この派遣団には、すでに延べ九百

五十名を超える方々が参加し、貴重な体験をされております。平成二十二年度につきましては、「第十六回神奈川県商業従業者海外派遣団(団員九名)」を昨年十一月に八日間の日程でフランス、イタリアに派遣いたしました。また、本年三月には、「第四十回神奈川県中小企業技術者等海外派遣団(団員十八名)」を同じく八日間の日程でデンマーク、フランスの二カ国に派遣する予定です。



モエ・エ・シャンドン社(フランス、シャンパーニュ)にて。第16回商業従業者海外派遣団。

### 二 刊行事業

(季刊誌「マイウェイ」の発行)

季刊誌「マイウェイ」を、原則、年度四回(六月、九月、十二月、三月)発行しております。小冊子ながら魅力あふれた地域の文化情報誌として幅広い年齢層からご愛読をいただいております。「マイウェイ」は、横浜銀行の各支店や神奈川県内の行政機関等におきまして無償配付しております。平成二十二年度につきましては、本特別記念号のほか、昨年六月に「鎌倉五山物語」、九月に「かながわネーチャーライフ物語」を発刊いたしました。

た。また、本年三月には、「かながわ民俗芸能物語」を発刊する予定です。

左から、財団設立20周年兼横浜開港150周年記念号「横浜ふるさと歌物語」(No.69)、横浜開港150周年記念号「横浜美術ふるさと物語」(No.71)、「鎌倉五山物語」(No.75)。



### 三 産業、文化、生活等に関する講演会・研修会等の開催事業

神奈川県内の産業文化、芸術振興に資するため、主に「はまぎんホール ヴィアマール」におきまして、講演会・演奏会等を開催しております。平成二十二年度につきましては、定例催事として、「春

の文化講演会(岸恵子氏)」、「ヴィアマール・ファミリィ・クラシックコンサートVol.10(青島広志氏、神奈川フィルハーモニー管弦楽団)」、「秋の文化講演会(有馬稲子氏)」を開催したほか、新規催事として、「はまぎん財団ロビー&ラウンジコンサート(六回)」及び「かながわ民俗芸能祭」を開催いたしました。なお、定例催事である「はまぎん寄席(林家喜久扇師匠・林家喜久蔵師匠)」は、本年二月に開催予定です。



「優雅なハーブ/徳永泰子」第1回ロビーコンサート。

### 四 文化・スポーツの振興及び生活環境整備を図る事業への支援事業

音楽、美術、文芸等の文化活動や障害児者福祉の発展活動を継続的に行っている団体に対して支援を実施しております。平成二十二年度につきましては、音楽部門では、特定非営利活動法人大倉山水曜コンサート、美術部門では、神奈川県美術展委員会(第四十六回神奈川県美術展)、横浜美術協会(第六十六回ハマ展)、文芸部門では、横浜文芸懇話会(第十六回横浜文学賞)への協賛金の贈呈を、また、横浜市中心障害児者を守る会連盟(第二十七回横浜市ふれあいスポーツ大会、二〇二一年成人を祝う集い)への記念品の贈呈を実施いたしました。



第46回神奈川県美術展「はまぎん財団賞受賞作品(内澤久美子作)」。第46回神奈川県美術展「はまぎん財団賞受賞作品(内澤久美子作)」。第46回神奈川県美術展「はまぎん財団賞受賞作品(内澤久美子作)」。

## 「はまぎんホール ヴィアマール」の運営事業 (事務代行)

イタリア語で「船便」を意味する「ヴィアマール」は、「みなとみらい」という好立地から、平成五年の開館以来、地域の文化の拠点として、コンサート、講演会、展示会などジャンルを問わず様々な催し会場として多くの方々にご利用(有料)をいただいております。ステージ、客席は可動式で、舞台形式から平土間形式まで多様に設定ができ、様々なパフォーマンスに対応できます。詳しくは、ホームページをご覧ください。か、ホール事務室(電話・045-2225-2173)にお問い合わせください。

## 編集後記

三溪原富太郎が製糸業および生糸貿易を中心とした実業の枠をこえて公益的活動に乗り出したのは三十年代後半ころから六十年代までのおよそ三十年ほどですが、この時期は横浜産業界のみならず日本経済にとっての試練の時期でした。第一次世界大戦に伴う経済の混乱と生糸市場の大暴落、七十四銀行の破綻、さらに関東大震災による横浜市の壊滅的被害などがありました。これらの危機に際して、つねに救済活動の先頭に立ち、横浜の復興のために尽くしたのが三溪翁でした。

本号「マイウェイ」では、公人として生きた三溪翁の公共活動とその思想に焦点を当てて特集いたしました。制作に当たりましては、原三溪市民研究会並びに、三溪園保勝会と同会参事の川端留司様には、多

大なご協力をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。

本号が、先に横浜開港百五十年記念事業の一つとして発刊いたしました「横浜ふるさと歌物語」、「横浜美術ふるさと物語」と並んで多くの皆さま方にご愛読いただき、こゝとができれば誠に幸いです。「マイウェイ」誌は、これからも県民の皆さま方に愛される文化情報誌を目指して、一層の努力を重ねてゆく所存です。引き続きまして、ご支援の程宜しくお願い申し上げます。

財団法人はまぎん産業文化振興財団

事務局職員一同

●次号予告(2011年3月下旬刊行予定)

「かながわ民俗芸能物語」横須賀  
三浦編(仮題)